

佐賀市埋蔵文化財調査報告書第14集

柴尾橋下流遺跡

昭和57年3月

佐賀市教育委員会

しば お ばし か りゅう
柴尾橋下流遺跡

昭和57年3月

佐賀市教育委員会



連孤文鏡

鈕を欠失している。四葉の外側には左に傾斜した櫛歯文体があり、次には素文の凸帯がある。それとさらに外側にある櫛歯文帯との空間に連孤文を形成する。外区はこれも左に傾斜している櫛歯文帯がめぐり、次に渦文と松葉文が配され、再び櫛歯文帯となり、無文の平縁へと続く。鏡には赤色顔料が付着している。

序

この報告書は農業基盤整備事業の施行に先がけまして、国庫ならびに県費補助を得て実施した佐賀市蓮池町古賀に所在します柴尾橋下流遺跡の発掘調査報告書であります。

柴尾橋下流遺跡では弥生時代から鎌倉時代にかけての多様な遺構、遺物が検出されました。中でも漢式鏡である連弧文鏡の検出は弥生時代から古墳時代にかけての社会構成を研究する上で重要な意味をもつものと考えられます。

この報告書が一般市民の皆さんの文化財に対する理解を深め、さらに学術研究など広く活用されれば幸いに存じます。

尚、調査に際しまして御協力いただいた地元の方々をはじめ、文化庁、県教育委員会文化課、県農林部の関係各位に深甚の敬意を表します。

昭和57年3月31日

佐賀市教育委員会

教育長 花 島 廣 次

例 言

- 1、本書は昭和56年度に実施した柴尾橋下流遺跡の発掘調査報告書である。
- 2、調査は佐賀市教育委員会が主体となり実施した。
- 3、遺物の復元は野中須矢子、福田敏枝が行った。
- 4、遺物の実測は石器類の一部を野中須矢子、福田敏枝が行った。
- 5、本書の執筆・作成・編集は福田義彦が行った。

本文目次

I. 序 説

1、調査に至る経過	1
2、調査の組織	1
3、遺跡の立地と還境	3
(1)地理的環境	3
(2)歴史的環境	3
4、昭和35年度調査柴屋橋下流弥生遺跡	5

II. 遺 構

1、土 壇	6
2、溝	10
3、井 戸	12

III. 遺 物 (観察表)

S D004出土連弧文鏡	29
--------------	----

IV. ま と め

插图目次

Fig 1	佐賀市及び神埼町・千代田町周辺遺跡分布図	2
2	柴尾橋下流遺跡周辺見取図	4
3	柴尾橋下流弥生遺跡出土土器	5
4	S K001土壌実測図	6
5	S K005土壌実測図	6
6	S K011土壌実測図	7
7	S K012土器溜実測図	7
8	S K013土壌実測図	8
9	S K015土壌実測図	8
10	S K018土壌実測図	8
11	S K022土壌実測図	9
12	S K026土壌実測図	9
13	S K028貯蔵穴実測図	10
14	S D001溝実測図	11
15	S D004溝実測図	11
16	井戸跡実測図	13
17	S K005、S K012出土土器実測図	22
18	S K012出土土器実測図	23
19	S K012、S K013、S K022、S K027、S K030出土土器実測図	24
20	S K030出土土器実測図	25
21	S K036、S K028、S D004、S D007出土土器実測図	26
22	S D001、S E004、S E007、S E014、S E024、S E025 クリーク、褐色土層出土土器実測図	27
23	石器、石製品、土製品実測図	28
24	S D004出土連弧文鏡	29
25	柴尾橋下流遺跡遺構配置図	折り込み(34、35)

図版目次

- | | | | |
|----------|--------------|--------|--|
| PL. 1. 1 | 発掘調査前全景 | PL. 20 | S D001石製品出土状況 |
| 2 | 調査区全景 | 21 | S D001溝 |
| 2. 3 | 調査区西部 | 8. 22 | S D004溝 |
| 4 | 調査区東部 | 23 | 鏡片出土状況 |
| 3. 5 | S K001土壌 | 24 | 鏡片出土状況 |
| 6 | S K011、013土壌 | 9. | 昭和35年度調査出土土器 |
| 7 | S K012土器溜 | 10. | S K012出土土器 |
| 4. 8 | S K012土器検出状況 | 11. | S K012出土土器 |
| 9 | S K012土器検出状況 | 12. | S K012、S K013、S K022
出土土器 |
| 10 | S K015土壌 | 13. | S K027、S K030出土土器 |
| 5. 11 | S K021土器出土状況 | 14. | S K036、S K028、S D004
S D001出土土器 |
| 12 | S K022土壌 | 15. | S D004、S E004、S E007
S E014、S E024、S E025
クレーク出土土器 |
| 13 | S K026土壌 | 16. | 褐色土層出土土器
石器・石製品・土製品 |
| 6. 14 | S K028貯蔵穴 | 17. | S D004出土連弧文鏡 |
| 15 | S K028土器出土状況 | | |
| 16 | S K030土器出土状況 | | |
| 7. 17 | S E025井戸 | | |
| 18 | S E025土器出土状況 | | |
| 19 | S D001土器出土状況 | | |

I 序 説

1、調査に至る経過

佐賀県は昭和52年度から農業基盤整備事業が計画されてきたが、佐賀市に於いてもその本工事が昭和56年秋よりこの蓮池地区から開始されることとなり、約45haがその対象となった。

これに先だち県文化課と佐賀市教育委員会は事前の確認調査を昭和55年11月に実施し、その結果城原川西岸の佐賀市蓮池町大字古賀字四本松の水田に遺構の存在が確認された。この蓮池地区はほとんどが平坦地で圃場部分での削平はないが、新設水路が計画されている部分においてのみ、昭和56年度に佐賀市教育委員会が調査を実施することとなった。

調査期間

自昭和56年9月9日

至昭和56年10月15日

整理期間

自昭和56年9月1日

至昭和57年3月31日

2、調査の組織 調査主体者 佐賀市教育委員会

調査担当者 佐賀市教育委員会

事務局 園 田 廣 次 (社会教育課課長)

森 田 栄 (社会教育課課長補佐)

北 原 学 (社会教育課文化係係長)

調査員 北 原 学

福 田 義 彦 (担当)

調査協力 中部農林事務所・蓮池土地改良区・佐賀市土地改良課・佐賀県文化課文化財資料室・県立博物館・佐賀市蓮池町見島・小松・堂地・古賀地区

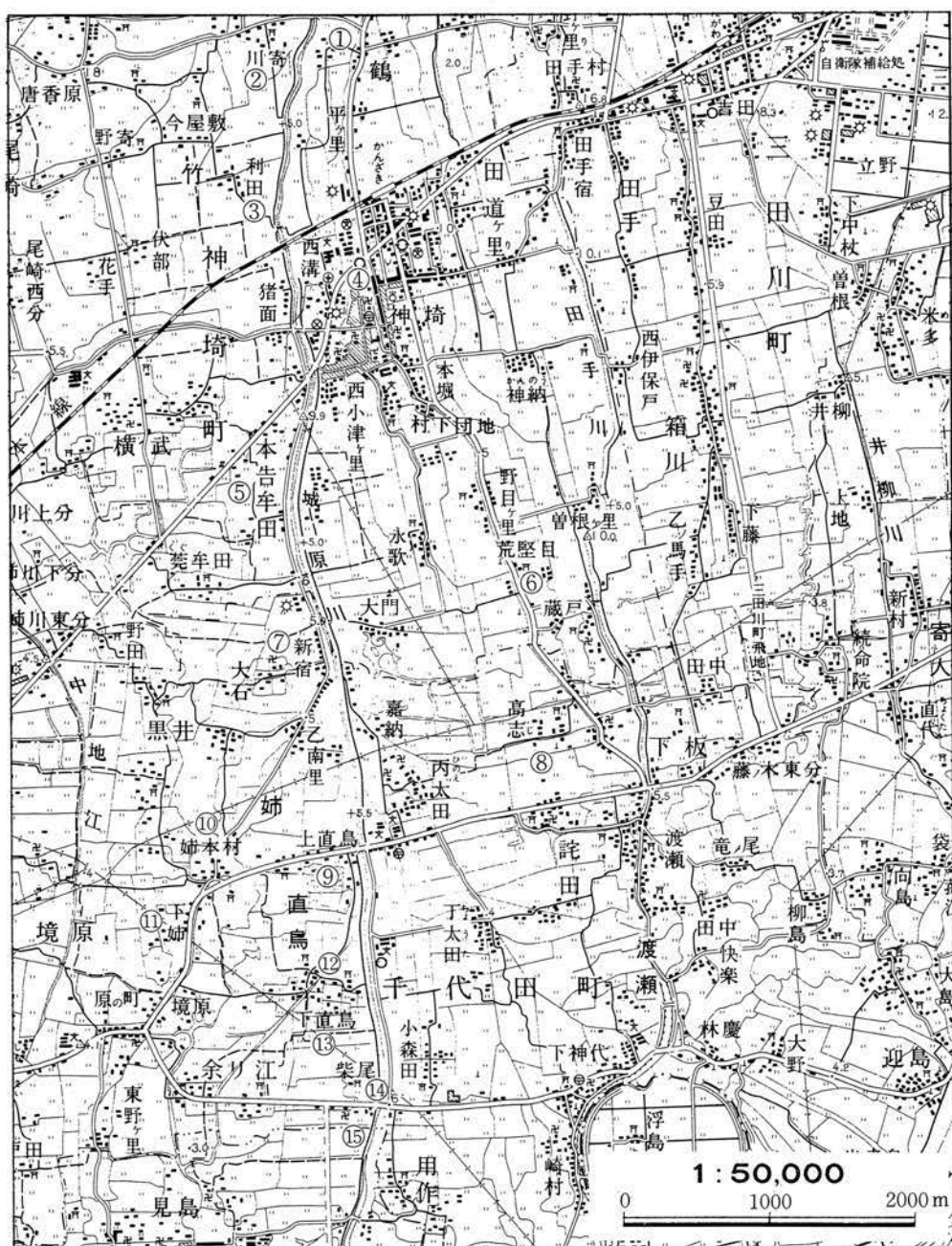


Fig.1 佐賀市及び千代田町・神埼町周辺遺跡分布図

- | | | | | |
|----------|------------|-----------|---------|-----------|
| ① 鶴籠遺跡 | ② 八子六本黒木遺跡 | ③ 利田遺跡群 | ④ 神埼宿遺跡 | ⑤ 牟田城跡 |
| ⑥ 荒堅目貝塚 | ⑦ 東大石遺跡 | ⑧ 詫田西分貝塚 | ⑨ 直鳥城跡 | ⑩ 姉貝塚 |
| ⑪ 姉二本松遺跡 | ⑫ 下直鳥貝塚 | ⑬ 直鳥四本杉遺跡 | ⑭ 柴尾遺跡 | ⑮ 柴尾橋下流遺跡 |

3、遺跡の立地と環境

(1) 地理的環境

柴尾橋下流遺跡は佐賀市蓮池町古賀四本松に所在し、遺跡北端は千代田町とクリークをはさんで接している。蓮池町は佐賀平野の中央東寄りにあたり、北に脊振・天山山系を望み南には有明海が広がっている。また、脊振山系に源を発する中地江川・佐賀江川・城原川が蛇行しながら流れ、それらの堆積作用で肥沃な平野が形成されている。標高は約3.5mで周囲にはクリークが縦横に走っている。

(2) 歴史的環境

この地区は佐賀市内において遺跡の分布が疎である地域であるが、遺跡の東約300mを流れる城原川水系の北部には多くの遺跡が分布している。北から、甕棺墓・土壙墓を多数検出した川寄吉原遺跡^{注(1)}、甕棺墓を出した利田柳遺跡^{注(2)}などがあるが、これらは神埼町に所在している。千代田町に南下すると、東大石遺跡、犬塚家久の築城とされている直鳥城跡、土器・石器に混って人骨を検出した下直鳥貝塚、甕棺墓を検出した柴尾遺跡や小森田遺跡などが知られている。

佐賀市にはいと南方に小松遺跡と蓮池城址が知られているだけであるが、城原水系からかけはなれるが、約4km北西部に牟田寄貝塚や平尾遺跡などがある。

蓮池城^{注(3)}は小田氏の居城で、応永年間(1394～1428年)に小田直光によって築かれたものであるが、天文22年(1553年)に龍造寺隆信がこれを攻めて下し、龍造寺家の居城としたものである。後に鍋島家の支配下になり佐賀城とあわせて二つの城が存在することとなった。しかし、元和元年(1615年)の幕府の一国一城令によって天守、矢倉などが壊され、寛永年間に蓮池支藩が創設されると、その地に藩の屋敷が設けられ御館と呼ばれた。現在この一帯は蓮池公園となり、その当時の建物は残っていないが、南に中地江川、北及び西には掘割が並びわずかに城郭的色彩を漂わせている。

ところで佐賀は干拓の盛んな所で、現在佐賀平野に於いて干拓地の占める割合は大きくその海岸線^{注(4)}も市内から大分南方に位置しているが、弥生時代(中期)頃には海拔4mラインの辺縁で国道34号線、及び佐賀から千代田町詫田、三根町江見を経て久留米に至る国道263号線付近と考えられている。もちろん直線的にそれらを結ぶのには無理があるということは衆の一致を見るところではあるが、調査が進むにつれその線が大幅に南北に蛇行することが考えられる。

また、干拓も記録によると紀元1300年頃から始められていたとされている。その当時の海岸線は米納津・南里・上飯盛・中原・福島・下古賀・新屋敷を結ぶ線と考えられ、江戸時代初期にはおおむね海拔2メートルまで南下し、その後干拓事業は隆盛をきわめ現在に至っている。

注(1) 『川寄吉原遺跡』 佐賀県教育委員会 1981

(2) 『利田柳遺跡Ⅲ区』 神埼町教育委員会 1980

(3) 『佐賀県の地名』 平凡社 1980

(4) 『佐賀市史』第1巻 佐賀市史編さん委員会 1977

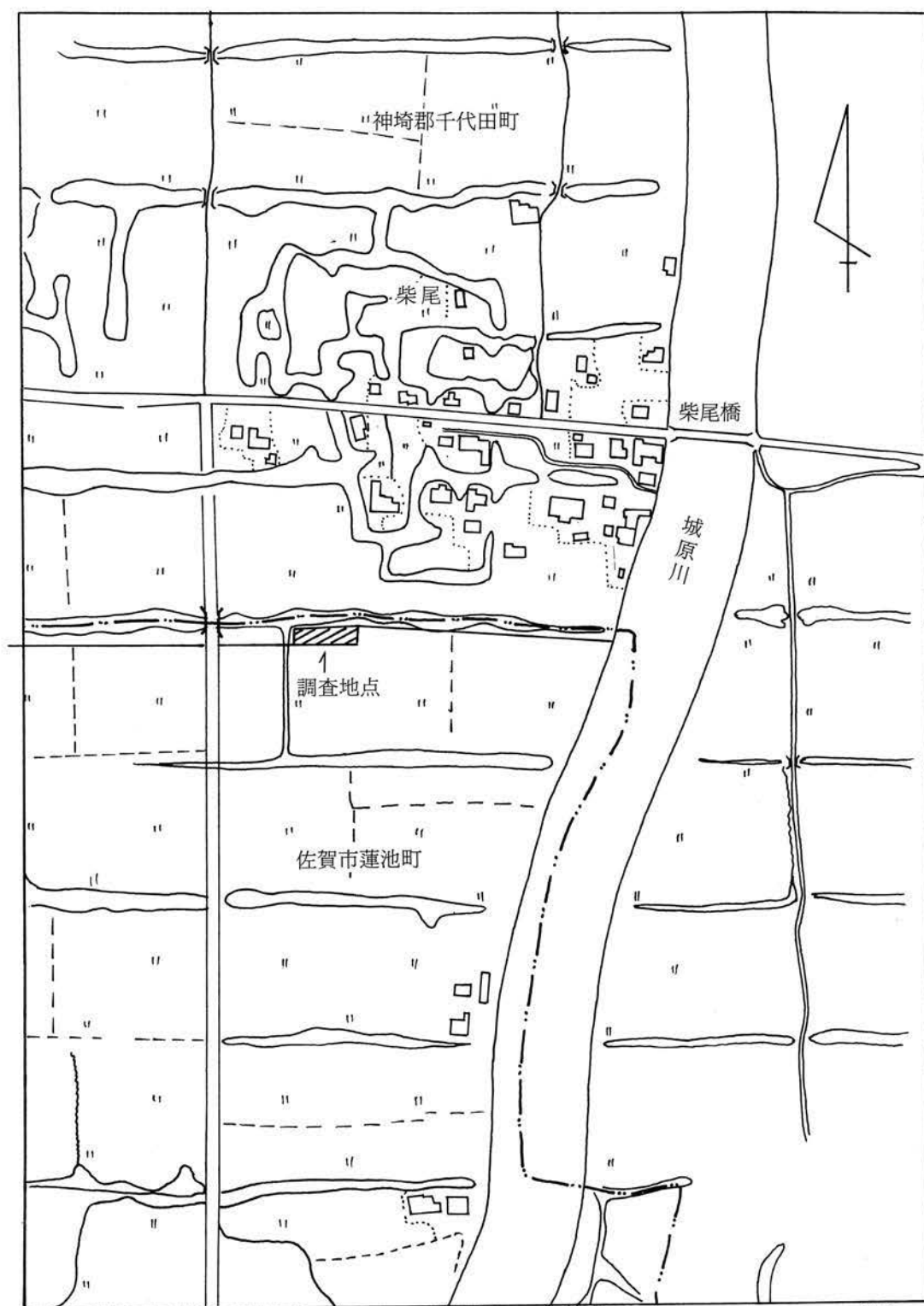


Fig.2 柴尾橋下流遺跡周辺見取図

4、昭和35年度河川改修工事に係わる柴尾橋下流弥生遺跡の調査

元来、「柴尾橋下流」の名は昭和35年の城原川の河川改修事業に伴う調査の際命名されたもので、その地点も現在の神埼郡千代田町柴尾付近を指す。しかし、現在は遺跡分布地図作成時に混乱をさけるため、千代田町のを紫尾遺跡、佐賀市のそれを柴尾橋下流遺跡とされている。

調査は昭和35年6月15・16日に県社会教育課木下之治・安本雪男氏の手で行われている。付近は河川改修工事の土揚げの為、攪乱が広範囲にわたり、比較的旧状を残していると思われる地点に2×2mのトレンチを入れ、層位的な調査がなされている。報告によるとその地点は6層に分かれ地表下0.85～1.0mに及ぶ。出土遺物は弥生後期の土器を主体とし、砥石・石庖丁・まくわ瓜に似た種子・種籾等がある。遺構としては住居跡が検出され、その形状はほぼ円形の竪穴式のもので、壁高は8cmを数え炉址も確認されている。また、注目すべきものとして、第3層の表土下52～60cm付近で検出された木材であるが、木下之治氏はこれを住居の屋根組ではないかと推察している。

調査範囲・期間が、時勢・諸々の事情により著しく限られた調査ではあるが、これは佐賀市の低湿地部分調査の先駆をなすもので、このことにより低湿地にも遺跡が存在することがより明確に認識されることとなった。

参考文献 『郷土研究』第10号 佐賀県郷土研究会 1964

『佐賀県の遺跡』 佐賀県教育委員会 1964

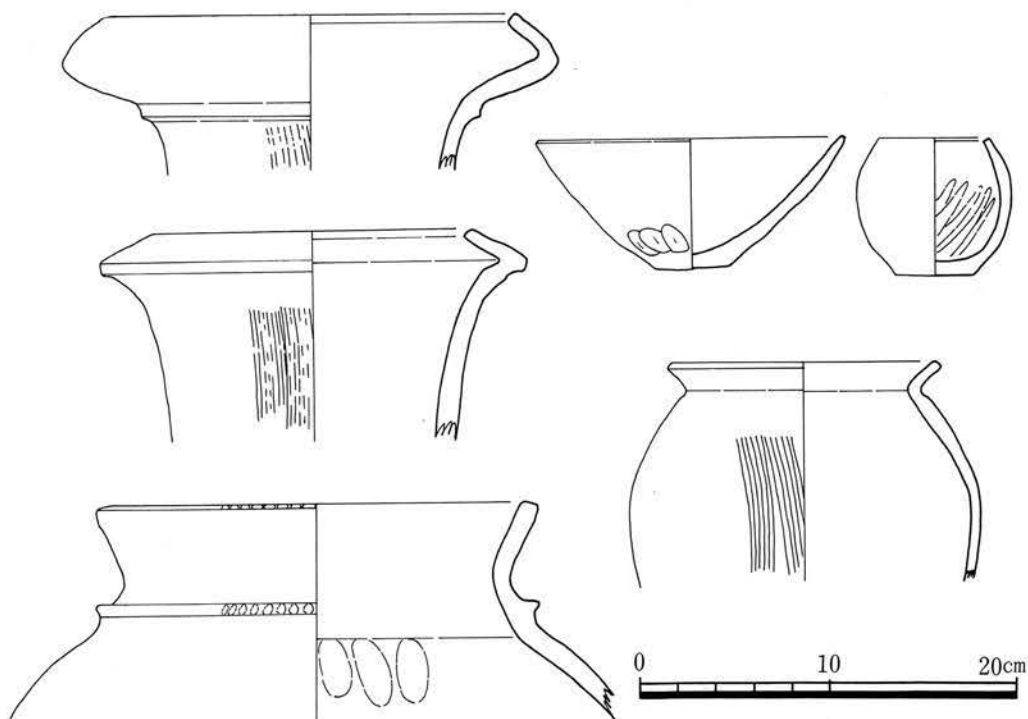


Fig.3 柴尾橋下流弥生遺跡出土土器

II 遺 構

柴尾橋下流遺跡では弥生時代、歴史時代の遺構を確認した。弥生時代の遺構として土壇32基・土器溜め1基・溝4条・貯蔵穴1基、歴史時代の遺構として溝1条・井戸5基がある。

調査区の中央から東部にかけて遺構は集中しており、西半部は井戸・土壇等数基を数えるにすぎない。当地区は調査前は水田であったが、伝え聞くところによると遺跡一帯は十数年前に地下げをしたらしく、クリーク北側の千代田町の水田と較べると数十cm低く、遺構上面の破壊も進んでいた。

1、土 壇

調査区全域より32か所に検出した。平面形も隅丸長方形、円形、楕円形等多様で、その規模もさまざまであった。その中で比較的特徴的なものを数基抽出しその詳細を記述する。

今回報告する土壇の中には、いわゆる貯蔵穴的なもの、井戸状のもの、土壇墓状のものなどいくつか数えられるが、そのいずれもが性格を決定する要素に欠ける為、いわゆる土壇として取り扱っている。

S K001土壇

調査区の北東部に位置する。上面の平面形は隅丸長方形を基調としたものであるが、遺構北東部がわずかに膨み隅丸五角形状を呈する。長辺1.35m、短辺0.5～0.8m、深さ0.26mである。底面は比較的平坦で壁は急角度に立ち上がる。埋土は層位的に識別が困難で全体的に淡黒褐色を呈し下部に行くに従い粘質土が増す。

遺物は埋土上層部に集中し、器種は大甕・壺型土器を検出した。

S K005土壇

調査区の中央西寄りに位置し、S K010土壇の北側掘込みの一部を切っている。上面の平面形は隅丸方形で長辺0.98m、短辺0.55m、深さ0.25mである。底面は平坦で壁は比較的角度的をもって立ち上がる。埋土は全体的に見て淡黒褐色を呈するが層位的な識別は困難であった。

遺物は埋土の全体から甕形土器・壺形土器・手捏土器等を検出したが、ほとんどが細片で図化できるのは手捏土器一個体にすぎない。

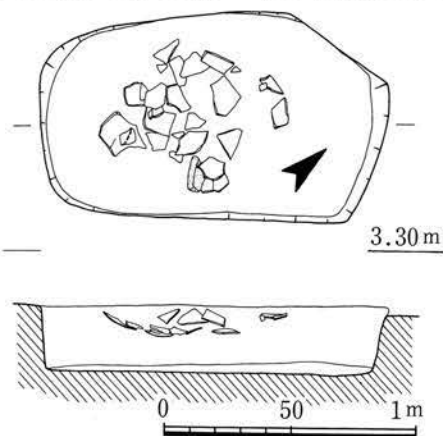


Fig.4 SK001土壇実測図

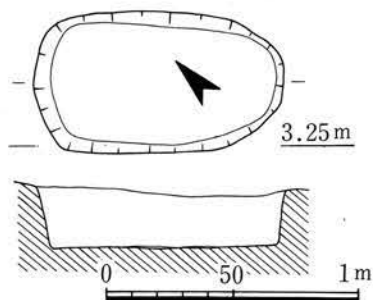


Fig.5 SK005土壇

SK011土壙

調査区の中央北寄りに位置し、西南部をSK013に切られている。上面の平面形は円形で径1.7m、深さ0.34~0.47mである。底面は中央に行くに従ってわずかに深くなり舟底状を呈す。壁は比較的角度をもって立ち上がる。埋土は2層に分かれており、全体的に淡褐色であるが、下部に行くに従い黄色味を増し粘質土に変わる。

遺物は埋土全体から甕形土器・鉢・坏等を検出した。

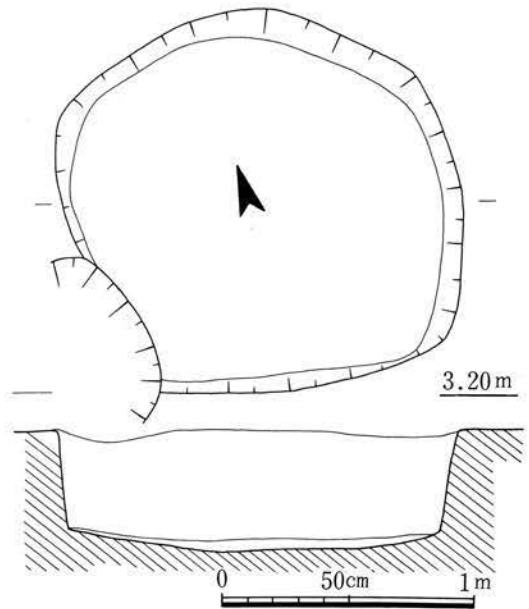


Fig.6 SK011土壙実測図

SK012土器溜

調査区の中央に位置し付近にはSD004、SK011、SK013等があり、当調査区で最も遺構の密なる部分である。上面の平面形は橢円形を基調とする不整形で、長径5m、短径2m程度、深さ0.2~0.3mである。SD004溝を切っていると考え、西側掘込

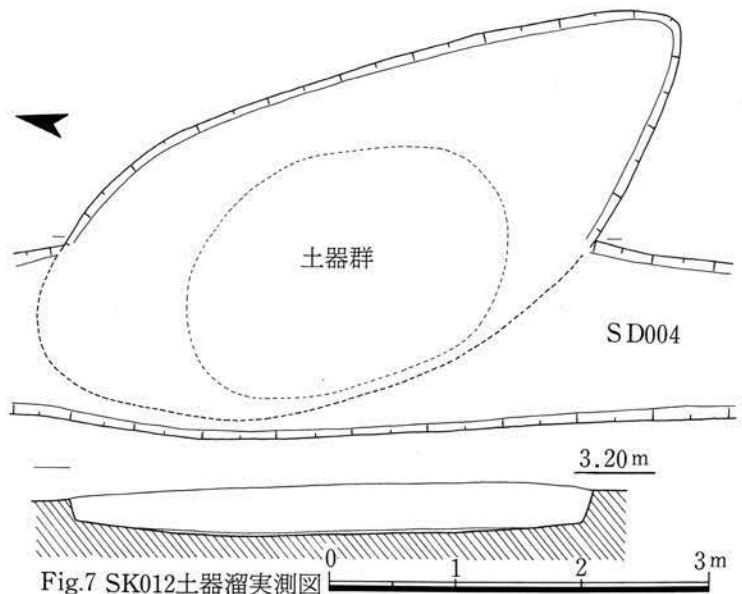


Fig.7 SK012土器溜実測図

ラインは明確に検出できなかった。底面は黄褐色の粘質土に掘り込まれ、全体的にゆるやかな起伏があり壁面は角度をもって立ち上がる。

埋土は淡褐色を呈し層位は明確に識別できなかったが、下部に行くに従って黄色味を増し粘性に富む。

遺物としては甕形土器・壺・高坏・鉢・器台等多岐にわたりその量も膨大で、遺構中央部に集中し上部から下部にかけて濃密に分布していた。いわゆる土器溜遺構と考える。

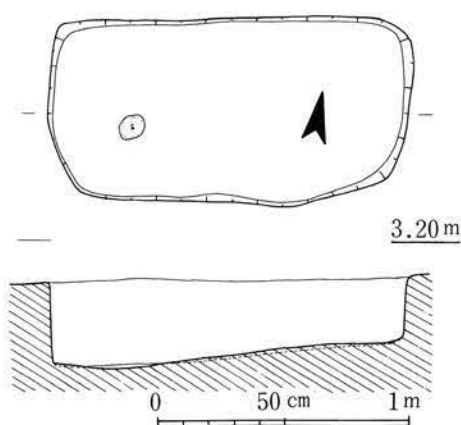


Fig.8 SK013土壌実測図

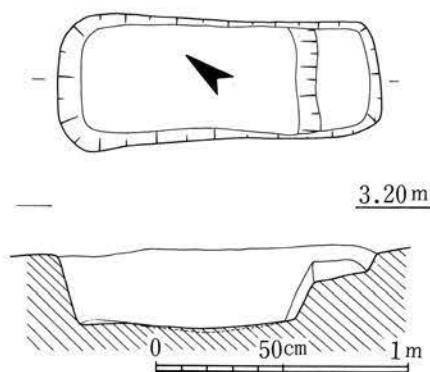


Fig.9 SK015土壌実測図

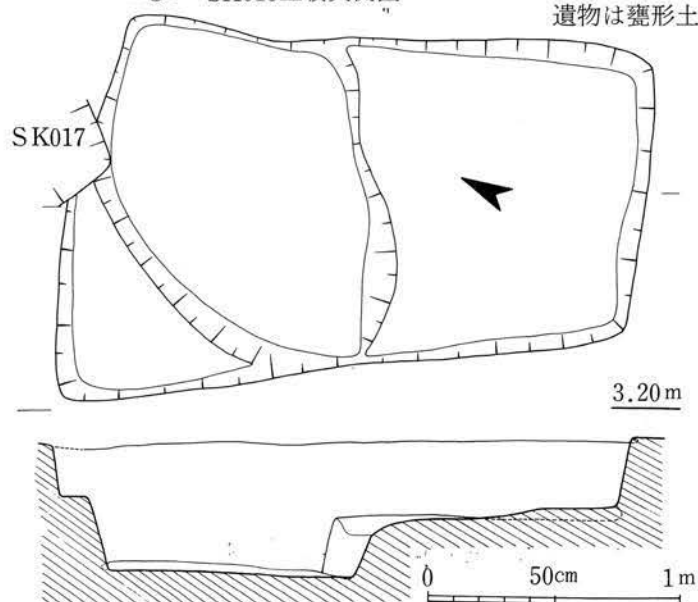


Fig.10 SK018土壌実測図

SK013土壌

調査区の中央に位置する。上面の平面形は隅丸長方形で長辺1.43m、短辺0.74m、深さ0.25~0.35mである。底面は西端部に行くに従いわずかに深さを増しゆるやかな起伏がある。壁は角度をもって立ち上がる。埋土は基本的には2層に分かれ、一層全域に焼成をうけたと思われる粘土塊が多量に含まれる。

遺物は主に2層の淡黒褐色土層より壺・鉢等を検出した。

SK015土壌

調査区の中央西寄りに位置する。上面の平面形は隅丸長方形で長辺1.28m、短辺0.49m、深さ0.3mである。遺構南端に長辺0.4m短辺0.2m程度の造り出し部分があり、掘り込み面からの深さは約0.1mである。底部はゆるやかな起伏があり壁面は角度をもって立ち上がる。埋土は基本的には一層で淡黒褐色土の中に焼土状の塊を含む。

遺物は甕形土器の細片を少量検出した。

SK018土壌

調査区の南西部に位置する。上面の平面形はいびつな隅丸の長方形で長辺2~2.3m、短辺1.3m、深さ0.3~0.5mである。西半部分が一段低くなっており、その部分の平面形は不整形を呈する。底部は西半部がほぼ平坦で東半部はゆるやかな起伏がある。埋土は基本的には二層に分かれているが見わけづらく、双方共

に黄褐色の粘土質ブロックを多く含む。

遺物は埋土全体から甕形土器・壺形土器等の細片を少量検出した。また、SK017土壌により西辺掘込みを切られている。

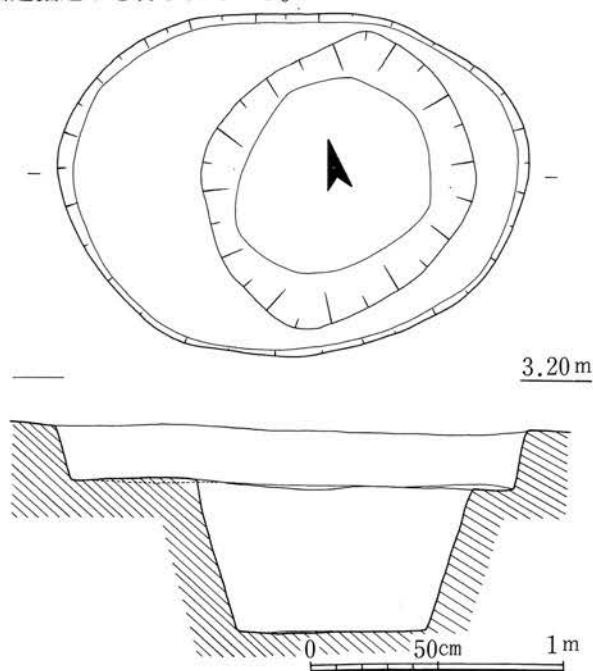


Fig.11 SK022土壌実測図

遺跡で検出した他の歴史時代の井戸跡よりも時代的に先行するものである。

遺物は埋土中より土器片を多数検出したが、ほとんどが細片で器形が明らかなのは高杯の脚部一点にすぎない。

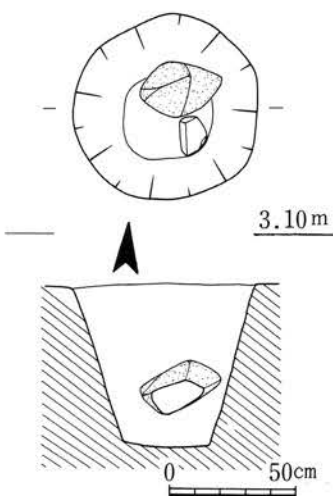


Fig.12 SK026土壌実測図

SK022土壌

調査区の中央北寄りに位置する。上面の平面形は楕円形で長径1.85m、短径1.35mである。二段目は中心よりやや東に寄って掘込まれている。掘込上面の平面形は円形で径1.1mである。深さは掘込面より、一段目0.2m、二段目0.8mである。

埋土は全体的に淡褐色を呈し、一段目の掘込みと二段目のそれが各々単独のものである可能性は低く、また切合関係も検出できなかった。一見して二段掘りの井戸跡の印象をうけるが少なくとも当

SK026土壌

調査区の西南隅に位置する。上面の平面形は円形で直径0.73m、底面径0.35m、深さ0.65mで断面は逆台形を呈する。遺構下半部より20cm×30cmと10cm×8cm程度の石を2個検出した。石材は2つとも花崗岩質のものであった。埋土は淡褐色を呈し基本的には2層に分かれ下層はやや黄色味を増す。一見して柱穴の印象をうけるが埋土中にも柱根の残片、腐蝕土も検出できなかった。また、この遺構に関連があると考えられる土壌は付近には確認できなかった。

遺物は埋土上層部より甕形土器の破片を数点検出したのみである。

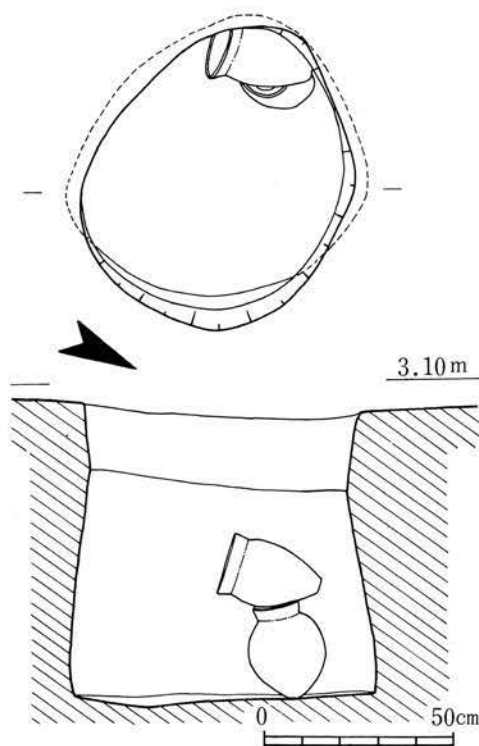


Fig.13 SK028 貯蔵穴実測図

2、溝

今回の調査で5条の溝を検出した。規模、形状もまちまちであった。この5条以外にも溝状のものを数か所に検出したが、溝と考えるにはその機能を有しないように思われ、土壌とするにしてもその範疇には加え難いものがあったがそれらは除外している。

SD001溝

調査区の中央に位置し、SE024井戸のすぐ北東部より北方に直線的に延びる。検出全長は7.80mで、掘込上面幅1.0m～1.2m、底面幅0.74m～1.04m、深さ0.36m～0.40mである。断面は逆台形を呈する。溝の南端には1.0m×0.7mほどの広さのテラスが造られており、平面形は半月形を基調とする不整形で深さは掘込面より0.16～0.20mである。このテラスの底面はおおむね平坦であるが北に向かうに従い、わずかに深さを増す。また、南端掘込みより2m北の西壁付近と北端東壁付近にそれぞれ1基のピットがある。前者は径0.2m、深さ0.2mの円形を呈する。後者は検出長1.2m×0.55m程度、深さ0.1mの楕円形を基調とすると考えられるものである。双方共にこの溝底面より検出したがその性格は不明である。

埋土は3層に分かれており、1層、淡黒色、2層、淡黒褐色、3層、淡黄褐色である。

遺物は主に2層と3層より検出した。土師器皿、瓦器碗、滑石製品などがある。

SK028貯蔵穴

調査区の南西隅に位置し、付近には東北方向約3m離れてSK026、SK027などがある。上面の平面形は不整楕円形で長径0.85m、短径0.65m、深さ0.75mである。全体の4分の3程度が袋状を呈し、上面掘込みから20cm程度の深さからえぐり込んでいる。底面はゆるやかな起伏がある。埋土は基本的には2層に分かれており、1層は淡黒褐色、2層は淡黄褐色土となっており、下部に行くに従い粘質を増す。

遺物は完形の甕形土器・壺形土器を各々一個体検出した。その外に埋土全域より若干の土器片を検出。完形土器の中には淡黒色で比較的粘質の土がつまっているだけで炭化物等の遺物は検出できなかった。

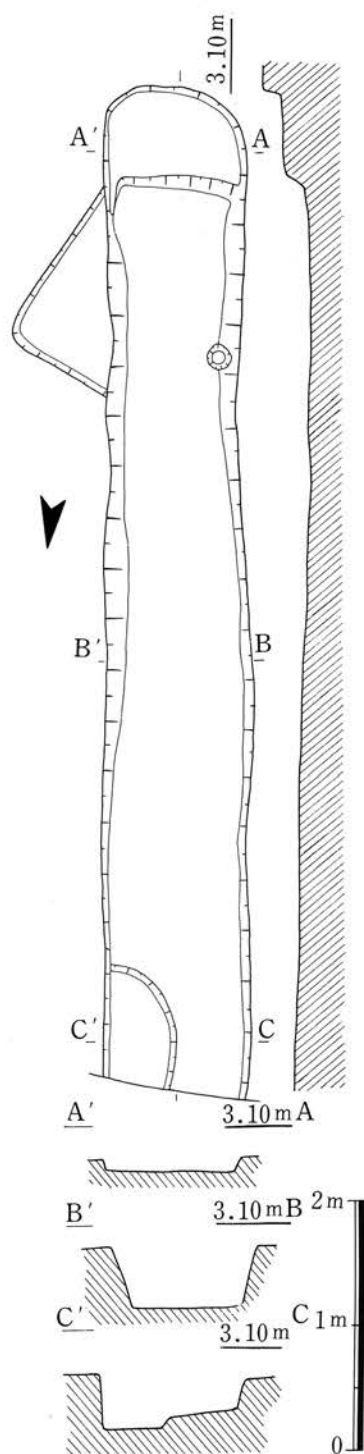


Fig.14 SD001溝実測図

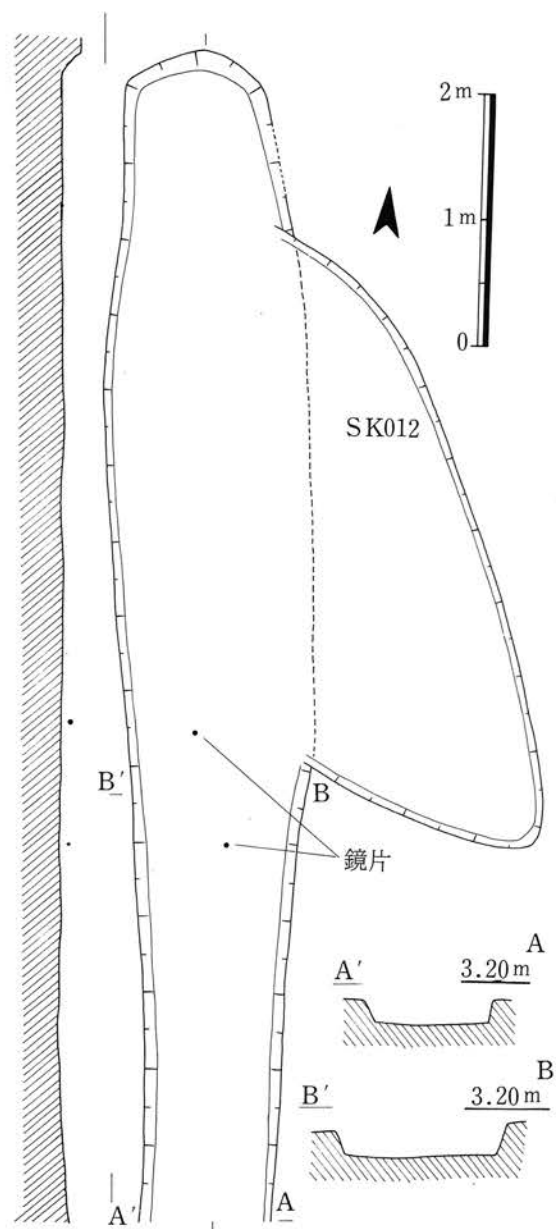


Fig.15 SD004実測図

S D004溝

調査区の中央東寄りに位置し、S K012、013土壌に切られS K038土壌を切っている。S K011土壌付近より南方に直線的に延びる。検出全長は9.5mで掘込み上面幅1.0～1.4m、深さ0.2～0.25m、底面幅0.8～1.2mである。断面は逆台形を呈する。埋土はS K012と大差のない淡褐色を呈し基本的には2層に大別される。

遺物は埋土全体から平均的に検出され、甕形土器、壺形土器、鉢、高坏、手捏土器、鏡等がある。ここで問題となるのは図面に示している通りS K012との切合関係が明確でないことであるが、少なくとも鏡片は東壁の南側S K012との交差点よりさらに南より検出したのでこの遺構に伴うものとする。

S D007溝

調査区の南西部に位置する。S E014井戸のすぐ西から南方に直線的に延びる。検出全長は5.5m、掘込み上面幅1.0m、底面幅0.6m、深さ0.5～0.6mである。埋土は識別が困難で、一般的に見て黄褐色を呈し黄色の粘質土のブロックを多量に含む。

遺物は埋土全体より検出し、壺形土器、鉢等がある。

3、井戸

当調査区で5基検出した。平面形は5つとも円形を呈し掘り方も1段掘りでその全体的な形状も似かよっている。しかし、埋土中よりわずかではあるが、木杵とも単なる木片ともつかない木くず状のものを検出した井戸もあり、元来素掘りではなかった可能性をもつものもある。

埋土は井戸によっては黒褐色の濃いものとそれに準ずるものがあったが、検出した遺物から判断すると時代的な差位はさほどみられない。

S E004井戸

調査区の南東隅に位置しS K037土壌を切っている。素掘りの一段掘りの井戸で、上面の平面形は円形で径1.04～1.10m、深さ1.10m、底径0.90mで壁はほぼ垂直に立ち上がる。底部は西から東にかけて緩やかな傾斜がある。埋土は黒褐色を呈し、下部になるにつれてその黒さが増す。上面から0.40～0.80mの深さのところで藁灰状のものを検出した。

遺物は上層から下層にわたって分布しているが特に下半部にかけて出土し、その種類も大半が瓦器片であった。他に滑石製品を3個体藁灰状の土層内より検出した。

S E014井戸

調査区の中央東寄りに位置する。付近にはS K015土壌、S D007溝などがある。素掘りで一段掘と考えられる井戸で、上面の平面形は円形で径0.90～0.95m、壁はほぼ垂直に掘られている。上面より1.3m程度で湧水がみられたので底面の検出を断念する。埋土は黒褐色で、上面から0.8～1.0m付近でS E004で見られたような藁灰状のものを含むやわらかなものを検出した。

遺物は埋土全般にわたって検出され、そのほとんどが瓦器でわずかに土師器を含む。器種は坏・皿で大半が細片であった。

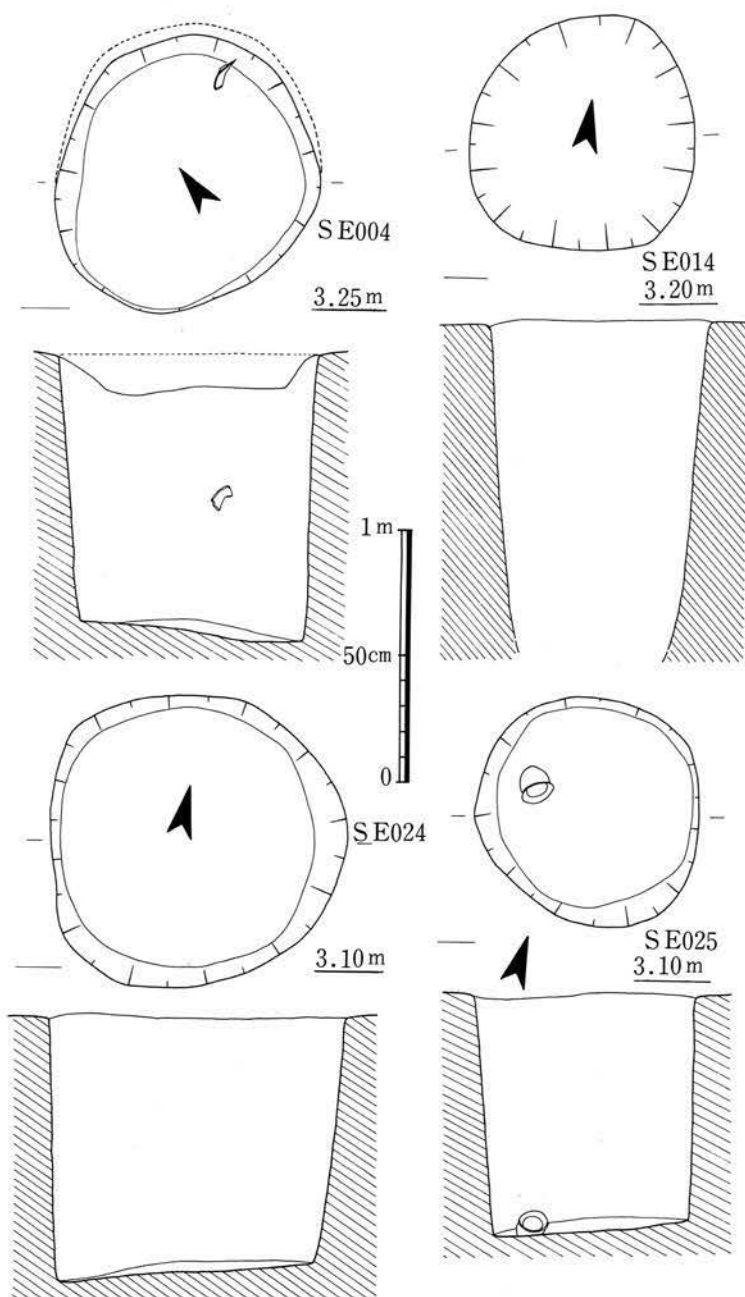


Fig.16 井戸跡実測図

SE024井戸

調査区の中央南端に位置する。一段掘りの井戸で、上面の平面形は円形を呈し径1.16~1.23m、深さ1.0m、底径1.0mで壁はほぼ垂直に掘られている。埋土は黒褐色を呈す。埋土下層より、わずかではあるが木皮状のものを検出したが井戸枠に使用されたものの残片の可能性もある。

遺物は埋土の全体から平均的に検出したが、比較的少量でその形状も大半が細片であった。遺物の種類は大半が瓦器碗であった。

SE025井戸

調査区の中央に位置し、付近にはSK026、027土壌がある。素掘りの一段掘りの井戸で上面の平面形は円形を呈し、径0.89~0.95m、深さ0.94m、底径0.75mで壁はほぼ垂直に掘られている。底面は中央部が周囲に対してわずかに低くなっている。埋土は黒褐色を呈し

下部に行くに従い粘質を増す。

遺物は瓦器・土師器に混って弥生式土器を検出したが、これはこの井戸の位置にあった土壌状のものから井戸掘削の際に落込んだものと推定される。ちなみに、掘込み北端の壁面にわずかにその痕跡を検出した。

なお、底面より完形の壺形土器を一個体検出した。

その他の遺構

S K030土壇

調査区の中央北端に位置し、S D007を切りS K029に切られている。東側掘込みが攪乱・削平されており全貌は明らかではないが、上面の平面形は楕円形を呈するものとする。残存長径で2.0m、深さ0.25m程度である。埋土は淡褐色を呈しS D004のそれよりもわずかに薄い。

遺物は遺構中央より一括して検出した。器種は甕形土器・壺形土器・鉢形土器・高坏・坏等多岐におよぶ。他の遺構の土器と器種を較べると高坏の検出量が多く祭祀遺構の可能性もある。

ピット群

主に調査区の東半に集中している。規模もまちまちで、それらの位置関係には何の脈絡も考えられず、いわゆる柱穴を想定するには無理がある。

III 遺 物

1、土器観察表

凡例

- (1) 土器番号は挿図番号、図版番号に一致する。
- (2) 法量の欄の(復)は復元値、(推)は推定値を表わす。
- (3) 甕形土器→甕、壺形土器壺、鉢形土器鉢の略である。

器 種 土器番号	(1) 口 (2) 器 (3) 胴 (4) 底 径 高 径	形 態 の 特 徴	技 法	備 考

SK005 (Fig.17) (単位cm)

器 種 土器番号	(1) 口 (2) 器 (3) 胴 (4) 底 径 高 径	形 態 の 特 徴	技 法	備 考
手 捏 1	(1) — (2) — (3) 4.5 (4) —	頸部内面に稜を形成して いる	外面は主にナデ、内面に指 頭圧痕が残る	埋土出土

SK 012 (Fig.17. 18) (単位cm)

器種 土器番号	(1) (2) (3) (4)	口器 胴底	径高 径径	形 態 の 特 徴	技 法	備 考
甕 2	(1) 34.8(復) (2) — (3) 36.0 (4) —			口縁部はゆるやかに外反する。 頸部内面に稜を形成している。 頸部外面に三角突帯をつまみ出している。 最大径は胴部上半にある。	口唇部に櫛状のもので刺突文をなしている。 胴部外面上半にタタキの痕跡が認められる。 内外面共に主にハケ目調整	
甕 3	(1) — (2) — (3) — (4) 9.6			底部はわずかなふくらみを持つ平底。	外面 主として縦方向のハケ目調整。 底部はハケのあとナデ。 内面 主として縦方向のハケ目調整であるが、2種類のハケを使用し、部分的にはナデによりハケ目を消している。	
甕 4	(1) 16.6(復) (2) 25.2 (3) 18.2(復) (4) 4.5			口縁部は「く」の字状を呈し、 端部は丸みをもつ。 底部は丸みをもつ平底。	外面 口縁部はヨコナデ、胴部は主として縦方向のハケ目、底部はナデ。 内面 主として縦方向のハケ目であるが、胴下半部に横方向のハケ目とナデがある。	
甕 5	(1) 17.7(復) (2) 27.6 (3) 16.8(復) (4) 3.8			口縁部は「く」の字状を呈し、 端部は丸みをもつ 頸部外面に強いヨコナデがある。 底部は丸みをもつ平底。	外面 口縁部、頸部はヨコナデ、胴部は縦方向のハケ目調整。 内面 胴部上半を縦方向のハケ目、下半部をナデ。	
壺 6	(1) 13.0 (2) — (3) — (4) —			口縁部と頸部は垂直に近い立ち上がりみせる。	内外面共に主として、ナデとヨコナデ。	
壺 7	(1) 7.5 (2) 6.8(推) (3) 9.1(復) (4) —			口縁端部は外反し、うすくなる。	内外面共に胴部上半をヨコナデ、下半部をナデ。	精練された粘土
壺 8	(1) 11.7(復) (2) 11.3 (3) 14.8 (4) 4.9			口縁部は外反し、端部はうすくなる。 底部はわずかな丸みをもつ平底。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部上半ハケ目下半部主としてナデ。 内面 上半部ヨコナデ、下半部ナデ。	
壺 9	(1) 5.6 (2) — (3) 8.7 (4) —			頸部は角度をもって立ち上り、 口縁部はゆるやかに外反する。	内外面共に上半部をヨコナデ下半部をナデ。 外面に一部ハケ目の痕跡。	
壺 10	(1) — (2) — (3) — (4) —				外面 波状文をヘラ状のものですり消している。 内面 主としてヨコナデ。	疑似口縁と胴部最大径により傾きを出した
壺 11	(1) 23.3 (2) — (3) 25.6(推) (4) —			口縁部は「く」の字状を呈し大きく外反する。 頸部外面に沈線。	外面 縦方向と横方向のハケ目。 内面 主として横方向のハケ目。	
壺 12	(1) 14.1 (2) — (3) 17.1 (4) —			「く」の字状を呈し、口縁端部は内側にくぼむ。	外面 縦方向のハケ目。 内面 口縁部を横方向のハケ目、胴部をヨコナデとナデ。	

SK 0 1 2 (Fig.18)

(単位cm)

器 種 土器番号	(1) (2) (3) (4)	口 器 胴 底	径 高 径 径	形 態 の 特 徴	技 法	備 考
壺 13	(1) 14.9 (2) 19.2 (3) 19.5(復) (4) 3.8			口縁部は短く「く」の字状を呈し、端部は丸みをもつ。底部は丸みのある平底。	外面 口縁部をヨコナデ、胴部は縦方向のハケ目調整の後ナデ。 内面 口縁部をヨコナデ、胴部上半を縦方向のハケ目下半部を横方向のハケ目調整。	
鉢 14	(1) 5.3(復) (2) 2.6 (3) — (4) 2.0			口縁部はわずかに内湾し、端部はうすくなる。平底	内外面共に指頭圧とナデによる。	
鉢 15	(1) 6.6 (2) 3.1 (3) — (4) —			口縁部は丸みをもつ。丸底	内外面共に指頭圧とナデによる。	
鉢 16	(1) 10.8 (2) 5.6 (3) — (4) 4.2			口縁部はわずかに内湾する。	内外面共にナデによる調整。	
鉢 17	(1) 12.6 (2) — (3) — (4) —			口縁部はわずかに内湾し、端部は断面三角形を呈する。	外面 主として縦方向のハケ目と下半部はヘラケズリによる。 内面 横方向のハケ目調整。	
鉢 18	(1) 13.4 (2) 5.8 (3) — (4) 1.8			わずかに平底状を呈する。	内外面共にヨコナデとナデによる。	
鉢 19	(1) 10.8 (2) 4.9 (3) — (4) —			口縁部はわずかに内湾する。	外面 ヨコナデとナデによる調整 内面 ヨコナデと下半部をヘラ状のものによるナデ調整。	
鉢 20	(1) 20.4(復) (2) — (3) — (4) —			口縁端部は丸みをもつ。	内外面共にハケ目とナデによる調整。	
鉢 21	(1) 18.2(復) (2) 8.4(推) (3) — (4) 5.5(復)			口縁部は外反し、端部はうすくなり、丸みをもつ。平底	口縁部内外面にハケ目の痕跡、主としてナデによる調整。	
鉢 22	(1) 18.5 (2) 9.3 (3) — (4) 4.5			口縁部は「く」の字状を呈し、わずかに内湾する。底部はわずかにふくらみをもつ平底。	口縁部内外面をハケ目調整の後ヨコナデ、胴下半部内外面共にナデによる調整。	
鉢 23	(1) 24.2(復) (2) 13.5(推) (3) — (4) —			口縁部は「く」の字状を呈し、ゆるやかに外反する。口縁端部にわずかなくぼみをもつ。底部は丸底と考える。	外面 口縁部から頸部にかけてヨコナデ、胴部は主として縦方向のハケ目調整がされているが底部付近にヘラケズリがわずかに見られる。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部は主として横方向のハケ目調整。下部に一部ヘラケズリが見られる。	
鉢 24	(1) 18.8 (2) 21.5 (3) — (4) —			底部は丸底と考える。	内外面共に主としてハケ目とナデ調整がされている。	

SK 0 1 2 (Fig.18. 19) (単位cm)

器 種 土器番号	(1) (2) (3) (4)	口 器 胴 底 径 高 径	形 態 の 特 徴	技 法	備 考
高 坏 25	(1) 31.8 (2) — (3) — (4) —		口縁部はゆるやかに外反し、 端部はくぼんでいる。	外面 上半部暗文、下半部暗文様の ヘラケズリのあとナデ。 内面 暗文、ヨコナデ。	精練された粘 土使用
杢形器台 26	(1) 11.8 (2) (受部径) (3) 12.1 (4) — (4) 13.5(復)		脚部はわずかに外反する。	外面 ナデと指頭圧。 内面 ナデとヨコナデ。	
器 台 27	(1) 16.4 (2) (受部径) (3) — (4) —		受部はゆるやかに外反し、端 部は丸みをもつ。	外面 受部の端部をヨコナデ、全体 的に強いタタキ。 内面 上半を横方向のハケ目、下半 部を縦方向のナデ。	
器 台 28	(1) 17.1 (2) (受部径) (3) 20.7 (4) — (4) 17.5 (脚部径)		受部はゆるやかに外反し、脚 部はわずかに内湾する。	外面 全面タタキのあとハケ目調整。 内面 上半横方向のハケとナデ、下 半部縦方向のハケ目。	磨滅が進んで いる
器 台 29	(1) 18.8 (2) (受部径)(復) (3) 23.1 (4) — (4) 18.4 (脚部径)(復)		受部、脚部共にゆるやかに外 反する。	外面 ヨコナデと、ヘラ状のものに よるナデ。 内面 ヨコナデとナデによる。	
器 台 30	(1) 18.0 (2) (受部径) (3) 22.5 (4) — (4) 19.3 (脚部径)(復)		脚端部はわずかに内湾する。	外面 ヘラ状のものによるナデとヨ コナデ。 内面 両端部付近、ハケ目調整のあ とヨコナデ。	

SK 0 1 3 (Fig.19)

鉢? 31	(1) — (2) — (3) — (4) 11.6 (脚部径)		端部は丸みをもち外反する。	主としてヨコナデ。	埋土下層出土
高 坏 32	(1) 24.2(復) (2) — (3) — (4) —		口縁端部は平坦である。	内外面共に、上半部をヨコナ デ、下半部をハケ目のあとナ デ調整。	〃
壺 33	(1) 19.0(復) (2) — (3) — (4) —		口縁端部は断面三角形を呈す る。 端部外面に刺突文。	主としてハケ目調整。	〃

SK 0 2 2 (Fig.19)

高 坏 34	(1) — (2) — (3) — (4) 12.2		柱状部が中空で裾部が「く」の 字状に開く。端部は丸い。	外面 縦方向のヘラミガキのあとヨ コナデ 内面 ヘラケズリのあとヨコナデ	
鉢 35	(1) 10.6 (2) 6.5 (3) — (4) 4.5		口縁端部は先細となり、外反 気味。	外面 ハケとナデ。 内面 下半部は強いナデとヘラ状の ものでナデ。	完形

SK 0 2 7 (Fig.19)

高 坏 36	(1) — (2) — (3) — (4) 8.5 (脚径)		3 個の透しがある。	外面 ヘラミガキとヨコナデ。 内面 ナデとヨコナデ。	
-----------	--	--	------------	-------------------------------------	--

SK 030 (Fig.19. 20) (単位cm)

器 種 土器番号	(1) (2) (3) (4)	口 器 胴 底	径 高 径	形 態 の 特 徴	技 法	備 考
鉢 37	(1) 17.8 (2) 12.9 (3) 16.7 (4) 12.0			口縁部は「く」の字状を呈し外反する。	外面 口縁部を指頭圧のあとヨコナデ 内面 主としてヨコナデとナデによる。	
鉢 38	(1) 17.7(復) (2) — (3) 16.8(復) (4) —			口縁部は「く」の字状を呈し外反する。	内外面共にヨコナデとナデによる。	精練された粘土使用
鉢 39	(1) 19.9(復) (2) 9.2(推) (3) — (4) 4.0(復)			口縁部と胴部の境に稜を有する 平底と考える。	内外面共に口縁部をヨコナデ 胴部をハケ目調整。	
高 坏 40	(1) 30.6(復) (2) — (3) — (4) —			口縁部の立ち上がりが短い。	内外面共に主としてヨコナデ とナデによる。	
高 坏 41	(1) 29.2 (2) — (3) — (4) —			口縁部は大きく外反する。	外面 口縁部をヨコナデのあと山形の 暗文坏部はヘラミガキ。 内面 主としてヨコナデとヘラミガキによる。	精練された粘土使用
高 坏 42	(1) 38.4 (2) — (3) — (4) —			口縁部は外反し端部は先細となる。	外面 ヨコナデとヘラミガキによる。 内面 ハケとヨコナデによる。	
高 坏 43	(1) 20.4(復) (2) — (3) — (4) —			坏部に稜を有する。	外面 ナデ、ヨコナデ、ハケ目調整。 による。 内面 主として横方向のハケ目とナデ。	
高 坏 44	(1) — (2) — (3) — (4) 16.0			裾部は内弯する。柱状部は中空である。	外面 ヘラミガキのあとナデ。 内面 柱状部をヘラケズリのあとナデ。	
壺 45	(1) 9.0(復) (2) — (3) 12.5(復) (4) —			口縁部は「く」の字状を呈し、 端部はうすくなる。	外面 口縁部をヨコナデ、胴部上半 をハケのあとナデ下半部をナデ。 内面 ヘラミガキのあとナデ。	精練された粘土使用
甕 46	(1) 11.6(復) (2) 19.4 (3) 17.0(復) (4) 6.3			口縁部は「く」の字状を呈し、 内弯気味、底部は丸みを持つ 平底。	外面 口縁部をハケのあとヨコナデ 胴部は主としてハケとナデによる。 内面 口縁部をハケ、胴部を主として ナデ。底部付近をヘラ状の ものでナデ。	
甕 47	(1) 27.7(復) (2) 45.6 (3) 28.5(復) (4) 8.0(復)			口縁部は「く」の字状を呈し、 端部は丸みをもつ 底部は丸みを持つ平底。	外面 口縁部をヨコナデ、胴部を縦 方向のハケ目、底部を一定方 向へのハケ目調整。 内面 口縁部を横方向のハケのあと ヨコナデ、胴部上半をハケと ナデ、下半部をハケ目調整。	
甕 48	(1) 25.5(復) (2) — (3) 26.7(復) (4) —			口縁部は大きく外反し、端部 外面に回転ヘラによるくぼみ を有する。 口縁部と胴部の境が明瞭であ る。	外面 口縁部をヨコナデ、胴部を縦 方向のハケ目調整。 内面 口縁部をヨコナデ、頸部付近 を、ヘラ状のものによるナデ 胴部をナデによる調整。	

SK 036 (Fig.21) (単位cm)

器種 土器番号	(1) (2) (3) (4)	口 器 胴 底	径 高 径	形態の特徴	技法	備考
甕 49	(1) — (2) — (3) 16.6(復) (4) 2.2			砲弾形を呈し、底部は小さな平底。	外面 上半をタタキのあとナデ、下半をナデによる。 内面 主としてナデ。	
甕 50	(1) 21.6(復) (2) — (3) 25.5(復) (4) —			口縁端部は断面三角形を呈す。	外面 口縁部をハケのあとナデ、胴部上半をタタキのあとハケ、下半をナデ。 内面 全面にハケ目調整。	

SK 028 (Fig.21)

壺 51	(1) 14.0 (2) 25.9 (3) 20.3 (4) —			口縁部は「く」の字状を呈し、外反する。 端部は断面三角形を呈し、その先端は極めてシャープである。 底部は丸底で焼成後外面から穿孔されている。	外面 口縁部から横方向のハケ目、胴部中央にタタキ、下半部をヘリによる。 内面 主としてハケ目調整がなされ、底付近がより力強い。	完形 貯蔵穴床直
甕 52	(1) 17.6 (2) 27.3 (3) 17.4 (4) 3.0			口縁部は「く」の字状を呈し、外反する。頸部内面の稜が明瞭である。 底部は丸みをおびた平底である。	外面 口縁部から胴部中央にかけてナメ方向のタタキ、下半部は縦方向のハケとナデ。 内面 口縁部を横方向のハケ目、胴部の大半を縦方向のハケ目、底付近をナデ。	//

SD 004 (Fig.21)

手捏 53	(1) 6.5 (2) 3.9 (3) — (4) —			口縁部は内弯気味に立ち上る。	主としてナデとヨコナデによる。	完形
壺 54	(1) 12.0(復) (2) — (3) — (4) —			口縁端部は丸味をもつ。	外面 ハケのあとヨコナデとナデ。 内面 口縁部をハケのあとヨコナデ、胴部をナデ。	溝南半出土
壺 55	(1) 24.0(復) (2) — (3) — (4) —			口縁部は逆「く」の字状を呈し、外反する。	外面 主としてヨコナデとハケによる。 内面 主としてヨコナデによる。	溝北半、SK 030に接して出土
甕 56	(1) 17.4(復) (2) — (3) — (4) —			口縁部は外反する。	主としてハケとナデによる。	溝南半出土
鉢 57	(1) 20.7(復) (2) — (3) — (4) —			口縁部は外反する。 内外共に口縁部と胴部の境が明瞭。	外面 口縁部を縦方向のハケのあとヨコナデ、胴部を横方向のハケ目。 内面 主としてハケとヨコナデによる。	//

SD 007 (Fig.21)

鉢 58	(1) 14.8(復) (2) 8.3 (3) — (4) 4.5(復)			口縁部は内弯気味に立ち上る平底	内外面共に主としてナデとヨコナデ。	
---------	---	--	--	-----------------	-------------------	--

SD001 (Fig.22) (単位cm)

器種 土器番号	(1) (2) (3) (4)	口器 胴底	径 高 径	形態の特徴	技法	備考
小皿 59	(1) (2) (3) (4)	8.3(復) 1.3 — 6.4(復)		口縁部は外反する。	口縁部内外共にヨコナデ、内面底部は不定方向のナデ底部は糸切り。 ロクロ回転右。	磨滅が進んでいる
小皿 60	(1) (2) (3) (4)	8.7 1.2 — 7.0		口縁部は内弯気味に立ち上る。	底部は糸切りのあとナデ ロクロ回転右。	完形
小皿 61	(1) (2) (3) (4)	9.3 1.2 — 7.6		口縁部は外反する。	底部は糸切り、板目を有する ロクロ回転右。	〃
小皿 62	(1) (2) (3) (4)	9.4(復) 1.4 — 7.4(復)		〃	底部に板目、ナデ。 ロクロ回転右。	
椀 63	(1) (2) (3) (4)	17.1(復) 5.1 0.6 (高台高) 7.4 (高台径)		口縁部は内弯する。	口縁部は内外面共に回転ヨコナデ。 胴部は内外面共にヘラミガキ ロクロ回転右	瓦器
椀 64	(1) (2) (3) (4)	17.4(復) 5.8 0.6 (高台高) 6.8 (高台径)(復)		立上りは内傾してのび、端部は丸くなる。	内外面共にヘラミガキと回転 ヨコナデ。 ロクロ回転左。	〃
椀 65	(1) (2) (3) (4)	16.2(復) 5.4 0.5 (高台高) 6.7 (高台径)(復)		〃	内外面共に回転ヨコナデとナデによる ロクロ回転右。	砂粒を多含 外面に炭化物 付着
椀 66	(1) (2) (3) (4)	— — 0.4 (高台高) 6.7 (高台径)(復)		高台内面を回転ヘラケズリにより抉っている。	底部に板目 ロクロ回転右。	瓦器
椀 67	(1) (2) (3) (4)	16.2(復) — — —		口縁部に玉縁をもつ。	体下半は露胎。	青磁
椀 68	(1) (2) (3) (4)	— — 1.1 (高台高) 6.9 (高台径)(復)		厚い高台をもつ。	高台部外面下半から高台内面にかけて露胎。	〃

SE004 (Fig.22)

椀 69	(1) (2) (3) (4)	17.0(復) 5.2 0.5 (高台高) 7.3 (高台径)(復)	立上りは内傾して端部は丸味をもつ。	口縁部内外共にヨコナデ。 内面下半部をヘラミガキ、外面下半部をヨコナデのあとナデ上げ。	瓦器
---------	--------------------------	---	-------------------	--	----

SE007 (Fig.22)

椀 70	(1) (2) (3) (4)	9.2(復) 1.5 — 7.5(復)	底部が平坦な高台状を呈する。	底部糸切り ロクロ回転右。	
椀 71	(1) (2) (3) (4)	10.2(復) 1.5 — 7.1(復)	体部はゆるやかに立ち上り、端部は丸みをもつ。	同心円状の糸切り 板目 ロクロ回転左。	
椀 72	(1) (2) (3) (4)	10.8 2.0 — 7.0	体部は内弯気味に立ち上る。	ヨコナデ、ナデによる 糸切り ロクロ回転右。	ほぼ完形 黒褐色を呈す

SE 0 1 4 (Fig.22) (単位cm)

器 種 土器番号	(1) (2) (3) (4)	口 器 胴 底 底 径 高 径 径	形 態 の 特 徴	技 法	備 考
小 皿 73	(1) (2) (3) (4)	9.1(復) 1.4 — 7.4(復)	口縁端部は外反する。	底部は糸切り、板目、ナデの順である。	
椀 74	(1) (2) (3) (4)	16.0(復) — — —	〃	ヨコナデ、ナデによる調整。	磨滅が進んでいる瓦器
椀 75	(1) (2) (3) (4)	— — 0.8 (高台高) 7.0 (高台径)	高台端部は丸味をもつ。	内面ヘラミガキ。	瓦器

SE 0 2 4 (Fig.22)

椀 76	(1) (2) (3) (4)	15.2(復) 5.1 0.6 (高台高) 5.9 (高台径)	口縁端部の断面は玉縁状を呈する。	主としてヘラミガキ、ヨコナデによる調整。	瓦器
---------	--------------------------	--	------------------	----------------------	----

SE 0 2 5 (Fig.22)

壺 77	(1) (2) (3) (4)	11.4 12.6 13.0 —	口縁部は外反気味に立ち上るが端部はわずかに内湾する。丸底。	口縁部は内外共にヨコナデ。体部外面は筆状のものによるナデ。	完形 井戸底部より出土
---------	--------------------------	---------------------------	-------------------------------	-------------------------------	----------------

遺構外出土遺物 (Fig.22)

壺 78	(1) (2) (3) (4)	— — 27.3 7.1	頸部と胴部に突帯を有する。	外面 主として縦方向のハケ目。 内面 頸部底部に横方向、胴部に斜め方向のハケ目。	クリーク出土
壺 79	(1) (2) (3) (4)	— — 14.0 —	頸部は外反し、内側に稜を有する。	外面 部分的にハケ目調整。 内面 胴下半部を指頭圧による調整	〃
高 坏 80	(1) (2) (3) (4)	— — — 15.9 (脚径)	柱状部は中空となり、シボリ痕を有する。透し穴は上部に2、下部に4か所。	主としてハケ目とヨコナデ。	磨滅が進んでいる褐色土層出土
甕 81	(1) (2) (3) (4)	— — 16.0(復) 7.8	底部はふくらみをもつ平底。	主としてハケのあとナデ	〃
器 台 82	(1) (2) (3) (4)	10.2 (受部) 14.6 (脚部) 13.1 (脚部)	受部先端は内湾気味	外面 上半部をラセン状にナデ上げた後ハケ目 内面 ナデと、ラケズリ	ほぼ完形 褐色土層出土 磨滅が進んでいる
甕 83	(1) (2) (3) (4)	— — 9.0(復) —	体部は扁平な球状を呈する。	カキ目の下半部を斜め方向の櫛状のものによる刺突文を有する。ヘラ記号を底部に有する。ロクロ回転右。	褐色土層出土
椀 84	(1) (2) (3) (4)	20.5(復) — — —	口縁端部は外反する。	重ね焼きの痕跡を有する。	〃 青磁

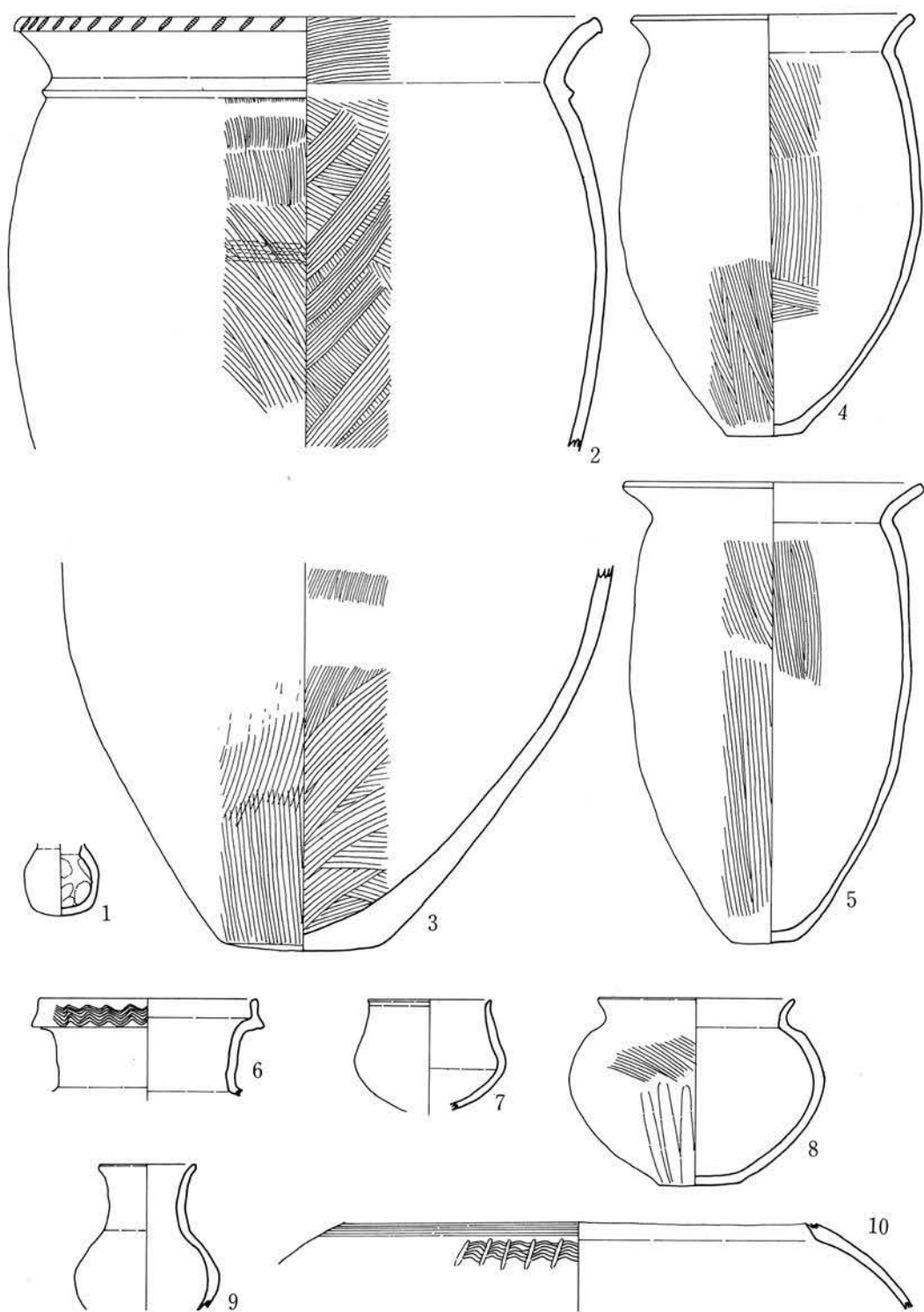
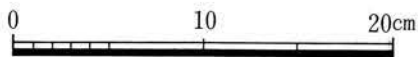


Fig.17 SK005(1)、SK012(2~10)出土土器実測図(1/4)



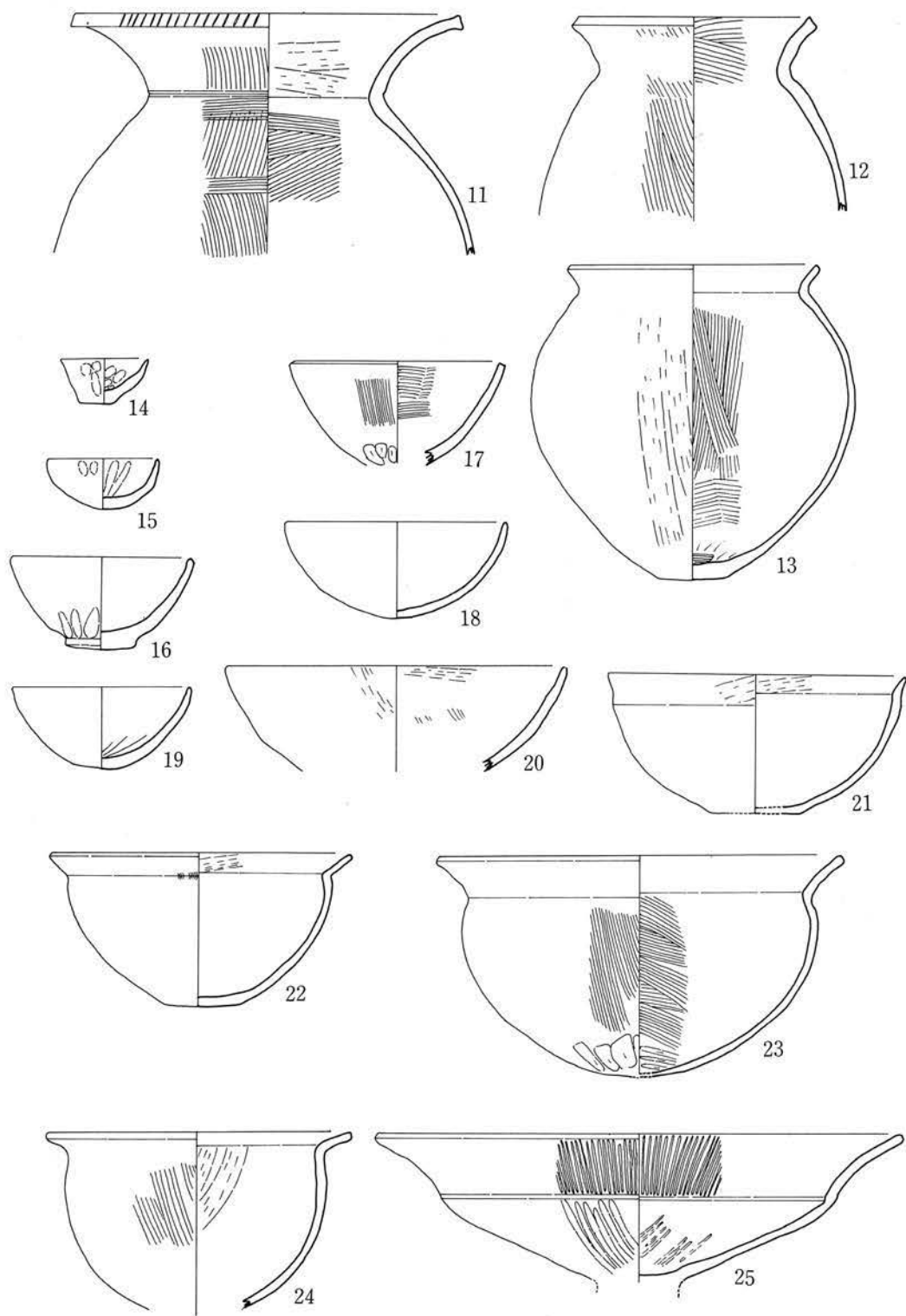


Fig.18 SK012出土土器実測図(1/4)

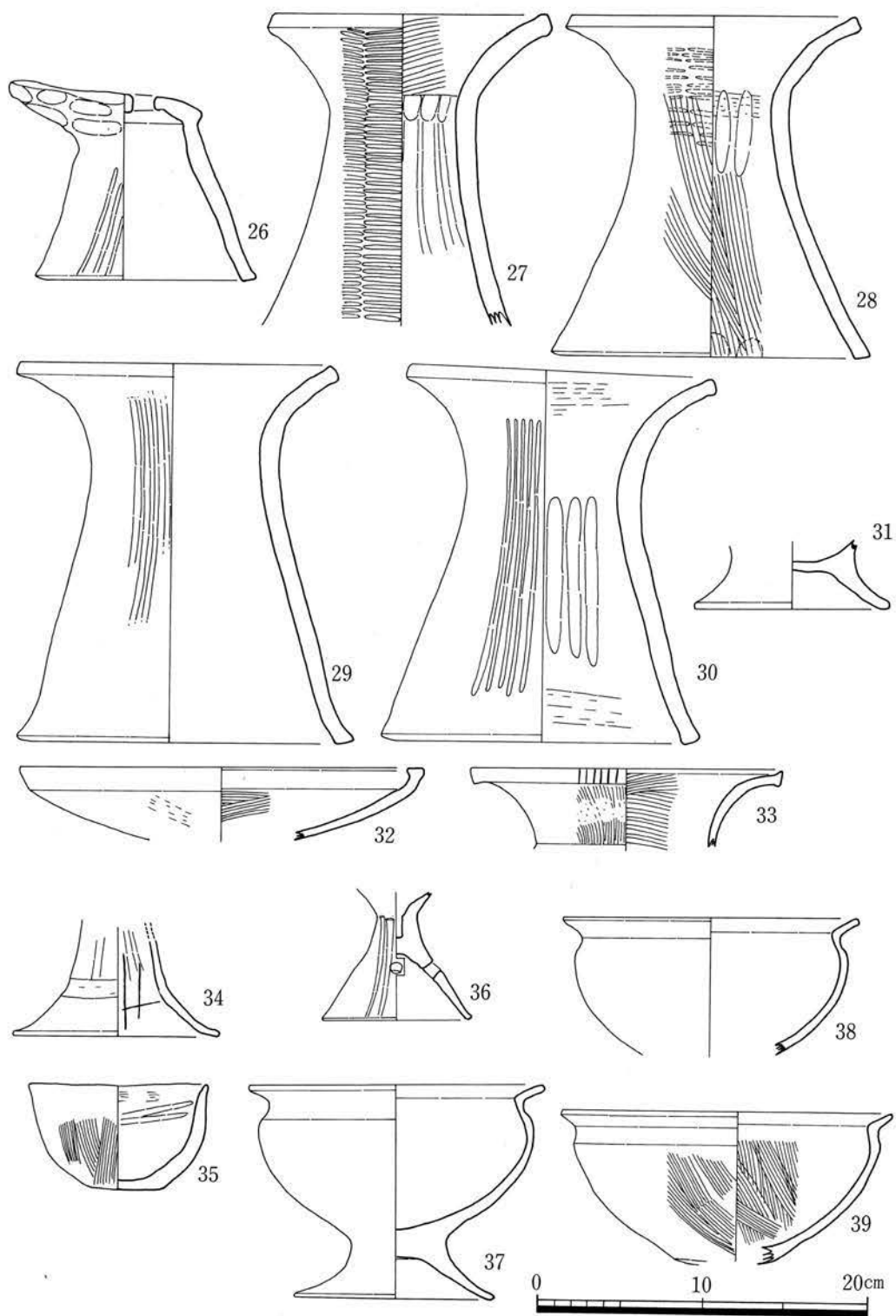


Fig.19 SK012(26~30).SK013(31~33).SK022(34. 35).SK027(36). SK030(37~39)
出土土器実測図

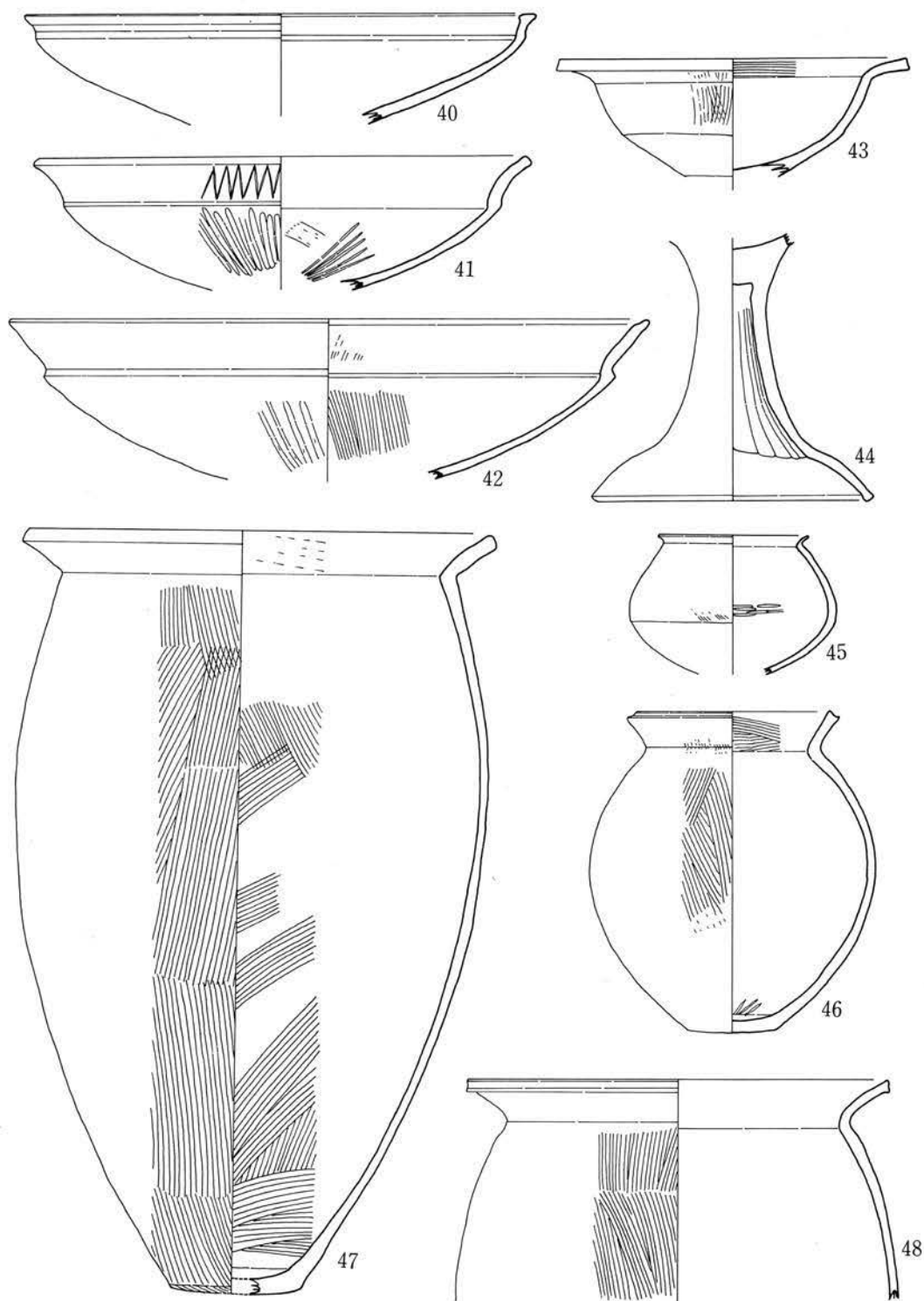


Fig.20 SK030出土土器実測図(1/4)

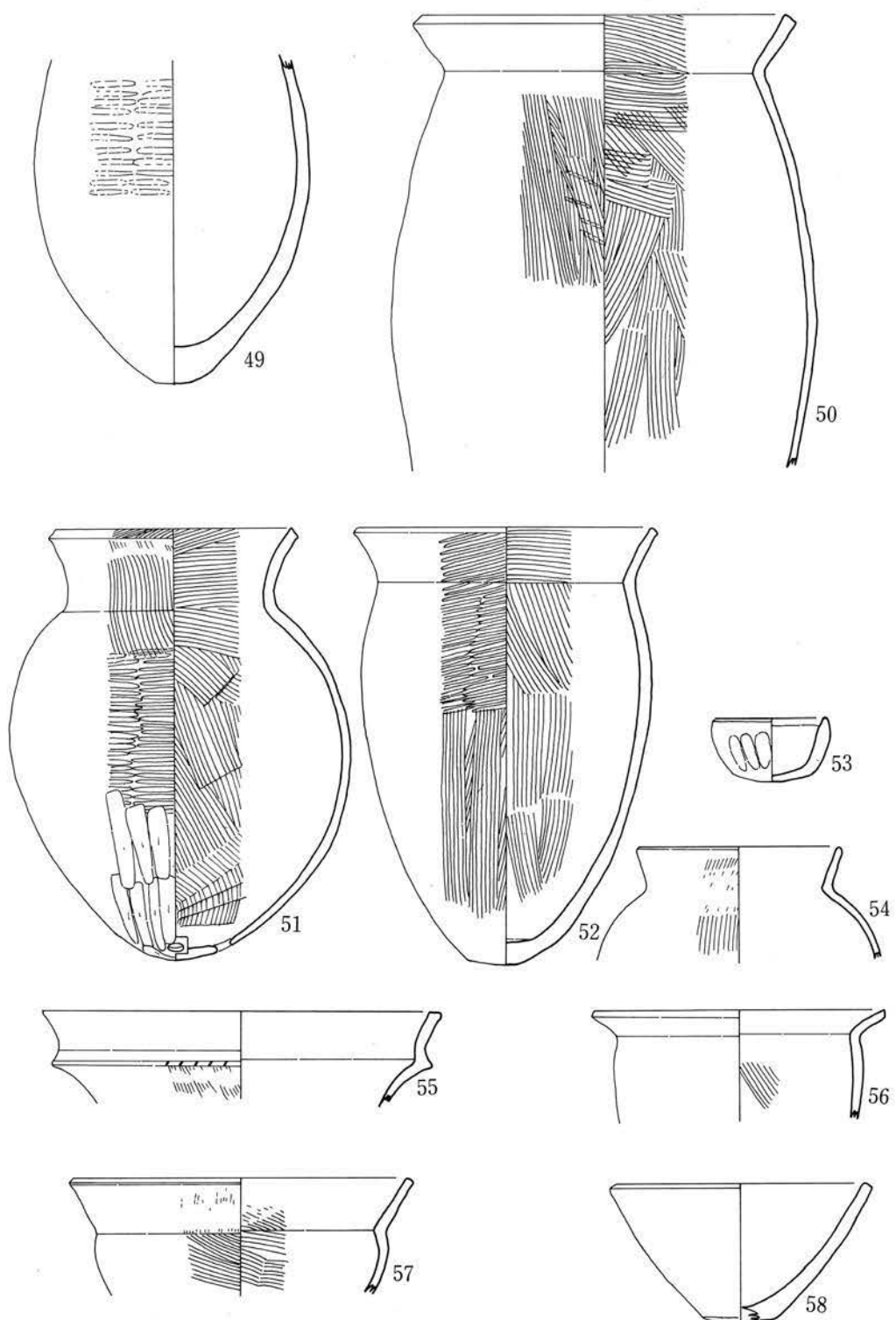


Fig.21 SK036(49・50), SK028(51・52), SD004(53~57), SD007(58) 出土土器実測図

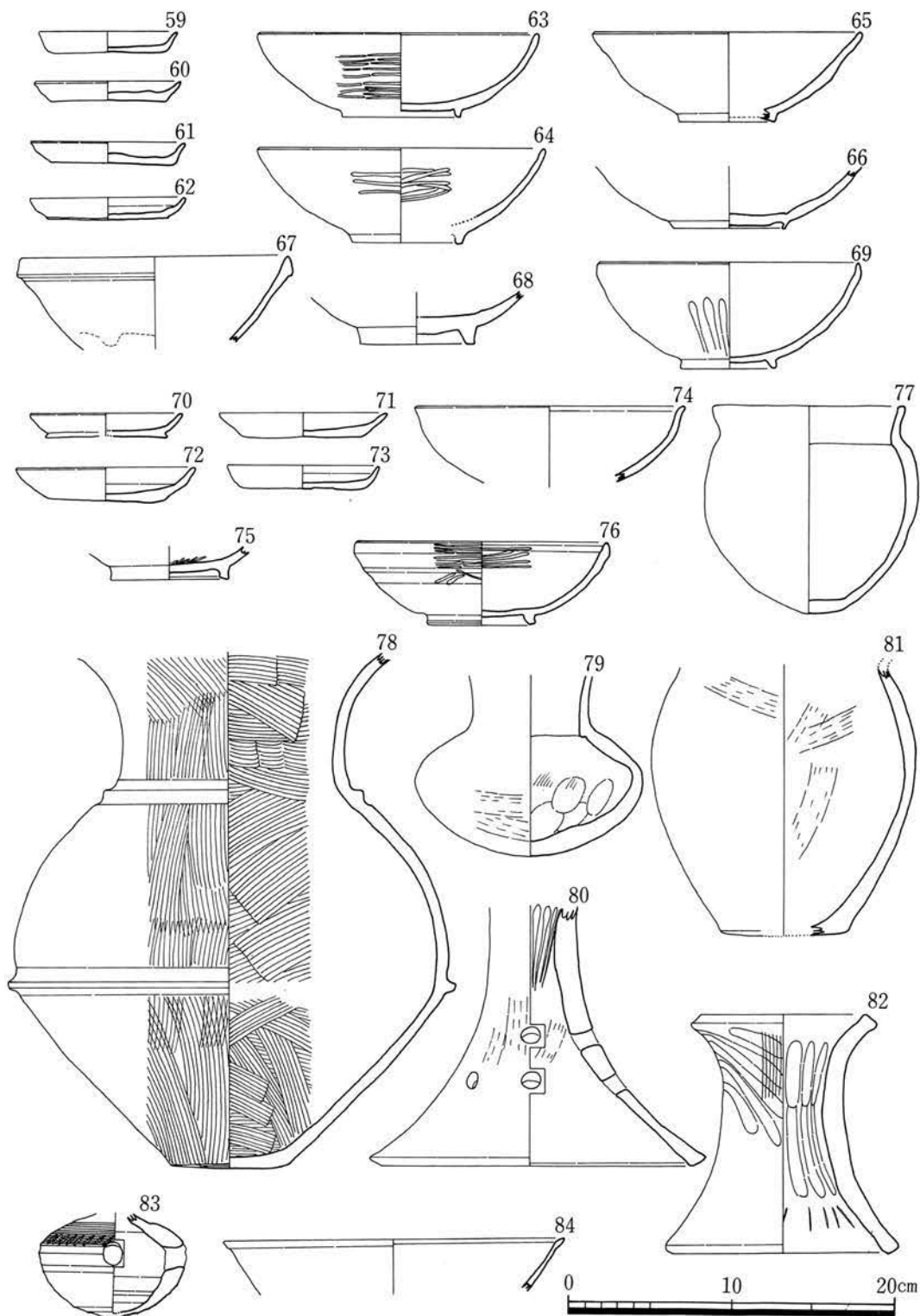


Fig.22 SD001 (59~68), SE004 (69), SE007 (70~72), SE014 (73~75), SE024 (76)
SE025 (77), クリーク出土 (78・79), 褐色土層 (80~84), 出土土器実測図 (1/4)

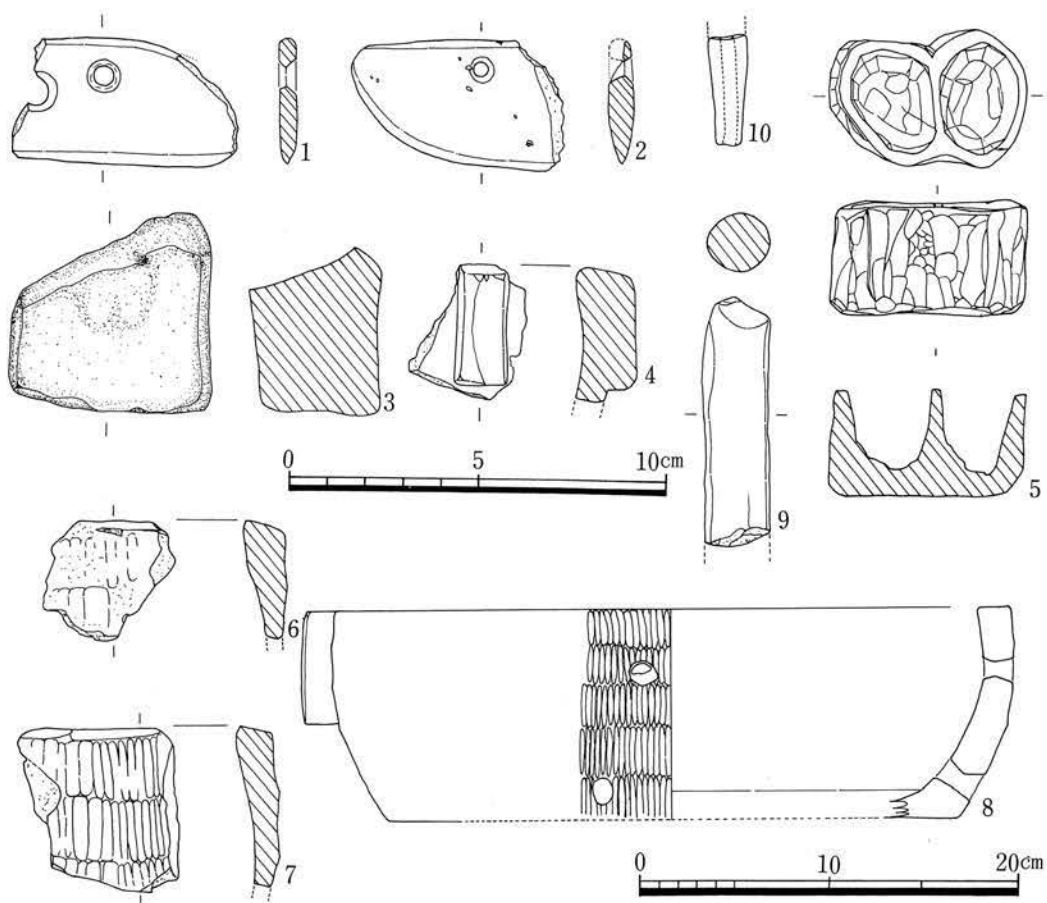


Fig.23 石器、石製品、土製品実測図(1/2・1/4)

石器・石製品・土製品観察表 (Fig.23)

番号	器 種	出土地点	材 質	規 模・特 徴	備 考
1	石 包 丁	褐色土層	凝灰岩質	5.6× 3.2 (cm)	
2	〃	表土下層	緑泥片岩質	5.9× 3.3 1とは刃部の位置が逆である	
3	砥 石	〃	砂 岩	5.3× 5.1	3面使用
4	石 鍋	黒褐色土層	滑 石	3.2× 2.8 外面にスス付着	石鍋把手部分
5	壺状石製品	SE004	〃	5.1× 2.8 淡褐色を程する滑石使用	
6	石 鍋	〃	〃	7× 6.8 淡茶褐色を程する滑石使用	磨滅が進んでいる溝底面より検出
7	〃	〃	〃	8.7× 8.2	
8	〃	SD001	〃	35.8(復元径) 外面にスス付着 11.2 (器高)	
9	柱状土製品	褐色土層	――	6.6× 1.5 (径)	
10	土 垂	SK012	――	2.8× 1.0 (最大径)	

S D004出土連弧文鏡

溝底面より全体の約 $\frac{1}{2}$ 程度検出し、復元径は14.5cmである。鏡片は大小2個体あり同一個体と考えるが接点が明確でない。鏡型式は鈕座の四葉の間に長宜子孫の銘をもつものと考えられる。四葉の外側には左に傾斜した櫛歯文帯があり、次には素文の凸帯がある。それとさらに外側にある櫛歯文帯との空間に連弧文を形成し、弧は8個からなるものと推定できる。外区はこれも左に傾斜している櫛歯文帯がめぐり、次に渦文と松葉文が配され、再び櫛歯文帯となり無文の平縁へと続く。背面には部分的に赤色顔料が所々に付着しており、元来鏡背全面に塗付してあったものと考えられる。

佐賀県下に於いて長宜子孫系の鏡の出土した遺構の種類を調べてみると、神埼郡東背振村大曲切通遺跡(土墳墓)・三養基郡上峰村坊所一本松(箱式石棺墓)・三養基郡上峰村二塚山遺跡(甕棺墓)などに見られるようにいずれも墓からの検出が一般的であるのに対し、当遺跡のそれは溝からの出土であり前者と比べると鏡の扱い方の違いがあるのではないだろうか。少なくとも県下では溝よりの出土の例を見るのは肥前国府^{注(1)}Iで報告されたもの一例があるが、それは小型の仿製鏡であり当遺跡のものとは多少意味合いを異にする。

注(1) 『肥前国府跡 I』 佐賀県教育委員会 1978

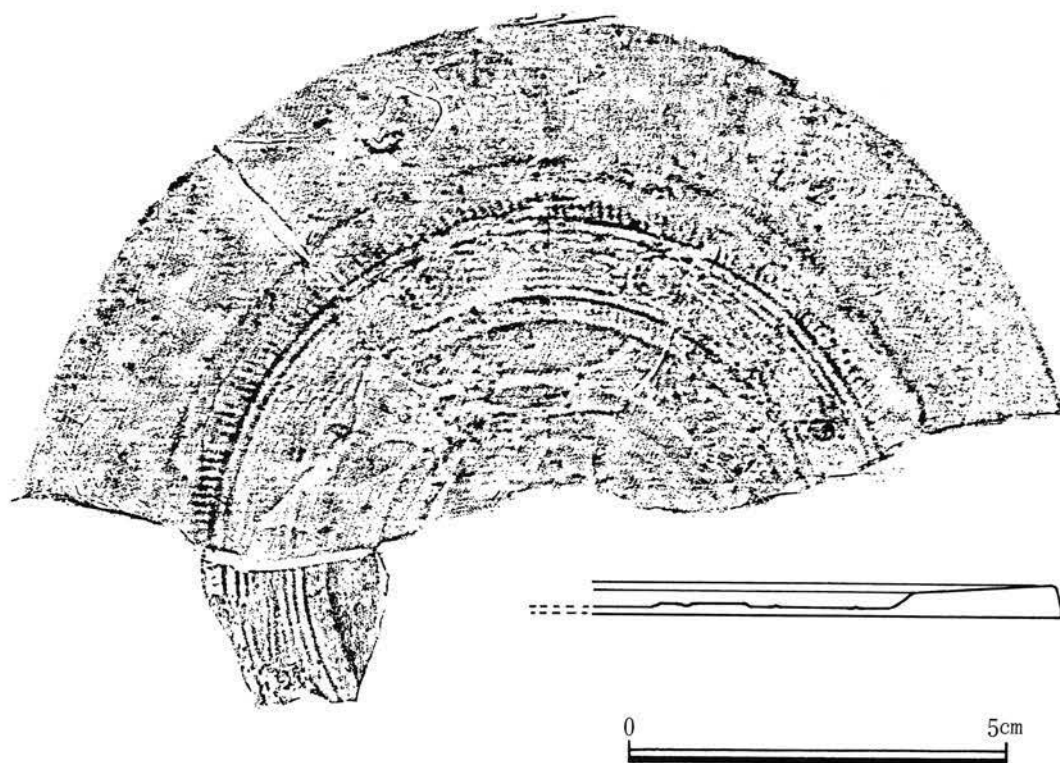


Fig.24 SD004出土連弧文鏡

IV ま と め

今回発掘調査した柴尾橋下流遺跡は千代田町と佐賀市にまたがると考えられる遺跡の部分的なものである。調査の結果、土壙32基、土器溜1か所、貯蔵穴1基、溝5条、井戸5基、ピット等を検出した。

土壙、土器溜、貯蔵穴などから検出した土器は、弥生時代終末から古墳時代前期にかけてのものが主体となっている。特にこの時期は佐賀県に於いて編年体系がほとんど整っていないので、福岡のそれとの平行関係について触れてみたい。

まず、当遺跡出土の土器で、SK012土器溜、SK030土壙、SD004溝、SK028貯蔵穴出土の土器を2期に大別するならば、I期にSK030、II期にSK012、SK028、SD004となると考える。

これらを佐賀平野出土の土器であるということを考えずに（地域的な特色を持っているかも知れないということを考えずに）単に形状のみを福岡の^{注(1)}編年に対比してみれば次のようになると考える。

	弥生時代終末	古 墳 時 代		
		宮 の 前		有 田 I
SK012		—		
SK028		-----	-----	
SK030		-----		
SD004		—	---	

上記のように福岡で言ういわゆる宮の前期に集中しているわけであるが、さらに検討する必要もあり関係諸氏の助言を受けて行きたい。

このように福岡の編年にあてはめてみるならば、柴尾橋下流遺跡出土の大半の土器はいわゆる古墳時代前期のものとなる。また先年報告した琵琶原遺跡のSB030、006住居址出土土器はすべて宮の前に含まれることとなる。

ここでもう1つの編年にあてはめてみる。それは昭和53年に刊行された^{注(3)}干塔山遺跡の土器群であるが、高島忠平氏はそれらを三期に分け、「干塔山遺跡の弥生後期の土器は、後期中頃から終末にかけてのものであろうが、福岡県狐塚遺跡の出土土器に比するとII期が、狐塚のそれに

相当する」としている。ここでその二者に柴尾橋下流遺跡や琵琶原遺跡出土の一連の土器を対比し、それらの間に平行関係があるとしてもさほど無理はないと考える。

このように九州北西部の弥生時代終末もしくは古墳時代前期の土器とされている土器群を単に対比してみるとさほど年代幅のない、ある一定の時期に納め込むことができる。ただ、それらの土器の実年代がいつ頃かは論議の分かれるところであるので今回の報告がその論争の一資料ともなれば幸いである。

次にS D 004出土の連弧文鏡について触れてみたい。概略は先述のとおりであるが、その出土遺構がいわゆる溝でない場合の可能性を提起してみたい。

遺構配置図にあるとおり調査区のほぼ中央に南北に延びているが、もしそれが南北で西又は東に曲がり、さらにその溝の東か西に埋葬遺構が存在したものと仮定すれば方形周溝墓となり得る可能性もある。しかし県下で検出された方形周溝墓といわれるものと溝の在り方を対比してみるならば、仮定をいくら重ねても方形周溝墓の可能性は棄てざるを得ない。

このように埋葬行為の伴わない可能性のある溝からの出土と考えれば、その鏡は最終使用形態に於いて少なくとも埋葬遺構出土のそれとは性格を異にするものと考えられ、きわめて祭器的な意味合いを深めるものとすることができる。

最後に遺跡の広がりであるが、元来千代田町の柴尾遺跡と佐賀市の柴尾橋下流遺跡は同一の遺跡としてとらえることができ、今回の調査区はその南西隅に位置すると考える。ちなみに、昭和55年度秋の確認調査では当遺跡の西方や南方ではほとんど遺物を採集することができなかった。

注(1) 『古文化談叢』 5 「福岡県・早良平野の古式土師器」 武末純一 1978

(2) 『琵琶原遺跡』 佐賀市教育委員会 1981

(3) 『千塔山遺跡』 基山町遺跡発掘調査団 1978

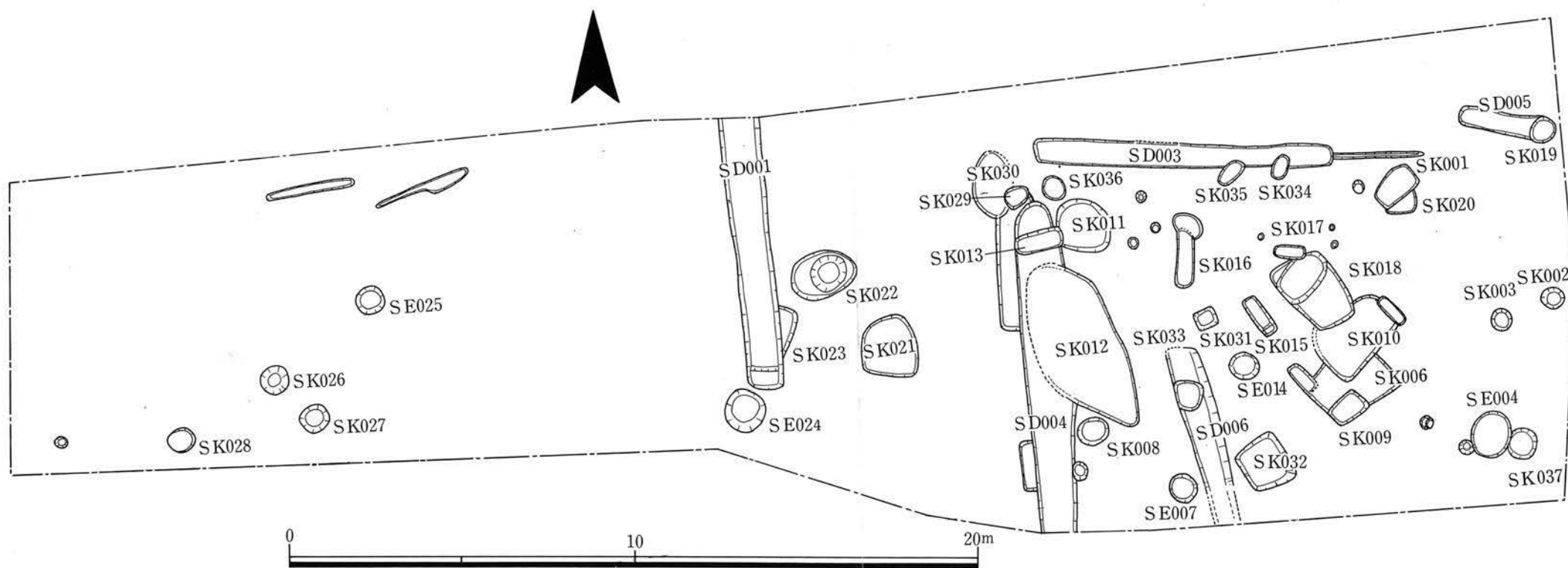


Fig.25 柴尾橋下流遺跡遺構配置図

版 図



1. 発掘調査前全景

2. 調査区全景

PL.2



3. 調査区西部

4. 調査区東部



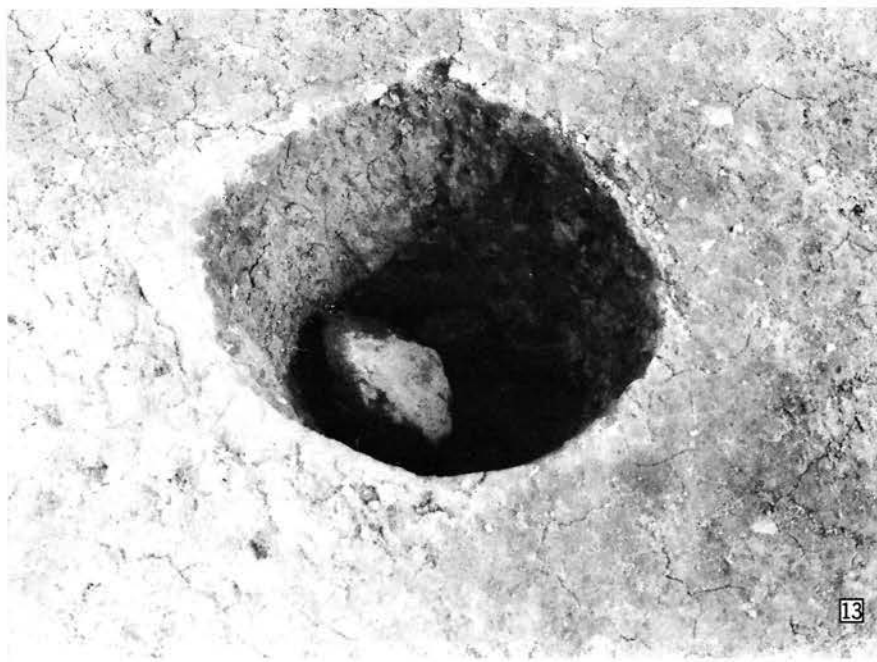
- 5. SK001(北から)
- 6. SK011, SK013
(東から)
- 7. SK012(南から)

PL.4



- 8. SK012土器検出状況(南から)
- 9. SK012土器検出状況(西から)
- 10. SK015(南西から)





11. SK021土器出土状況
(南から)

12. SK022(東から)

13. SK026(北西から)



14



15



16

- 14. SK028貯蔵穴
(東から)
- 15. SK028土器出土状況
(東から)
- 16. SK030土器出土状況
(西から)



17



21



18



19



20

- 17. SE025(南から)
- 18. SE025土器出土状況(東から)
- 19. SD001土器出土状況(西から)
- 20. SD001石製品出土状況(南から)
- 21. SD001(南から)

PL.8

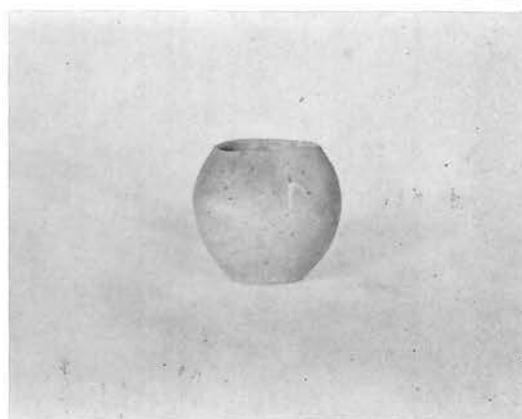
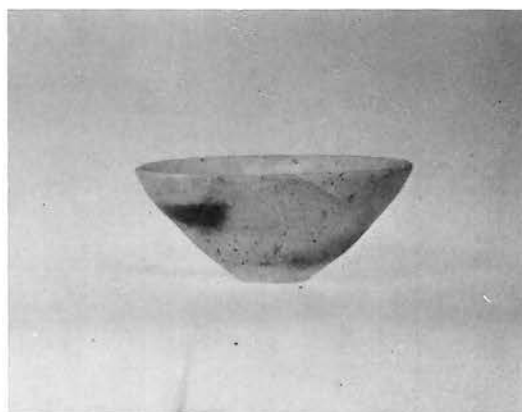
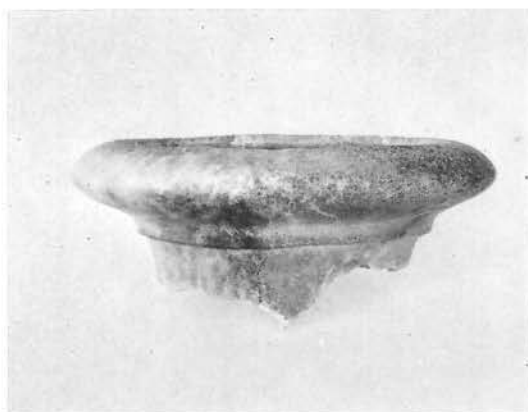


22. SD004(北から)

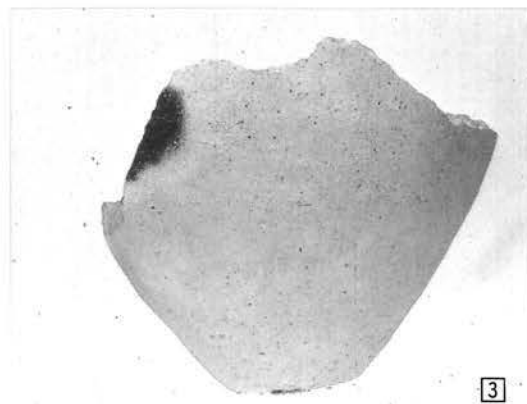
23. 鏡片出土状況(南から)

24. // (南から)

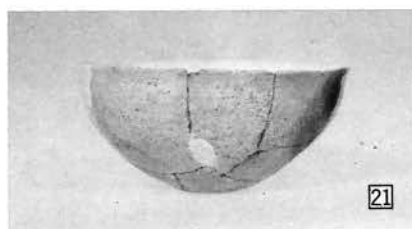
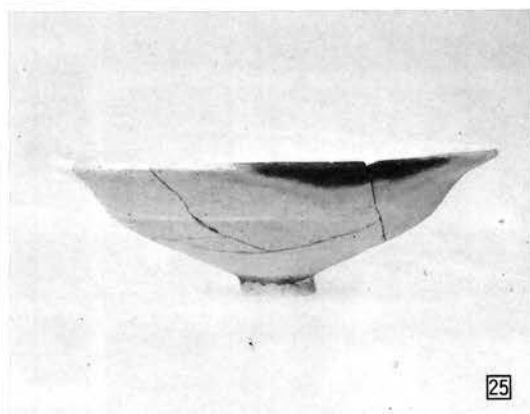
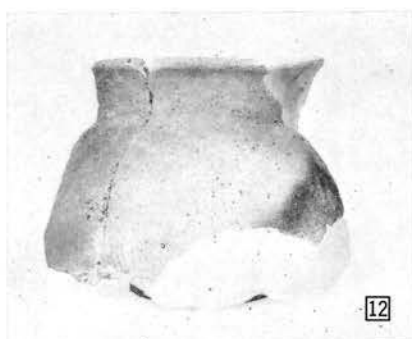




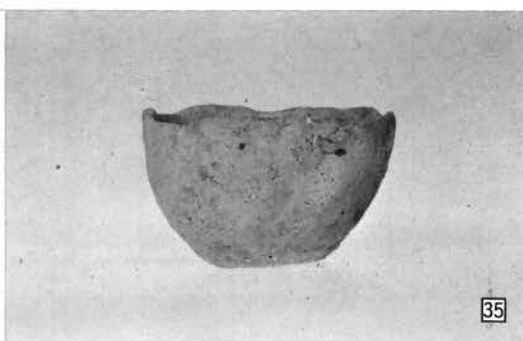
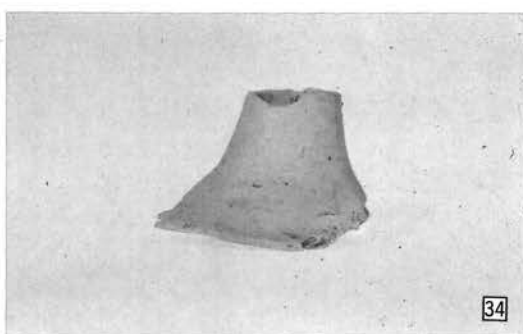
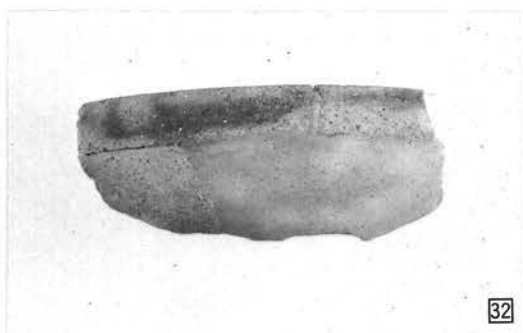
昭和35年度調査 出土土器



SK012出土(2~8・11)

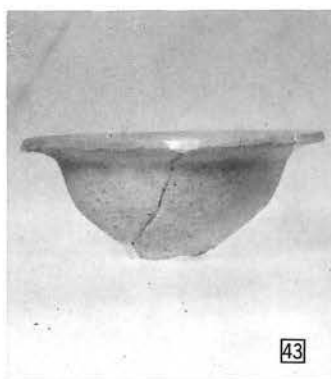
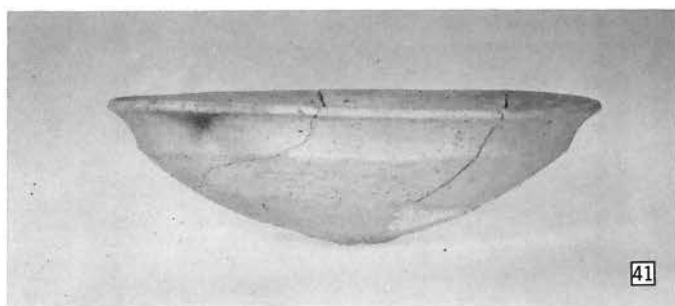


SK012出土(12・13・16・18・21～26)



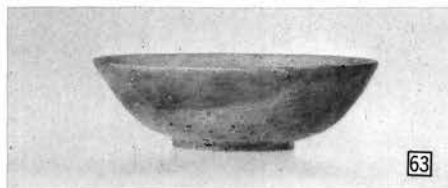
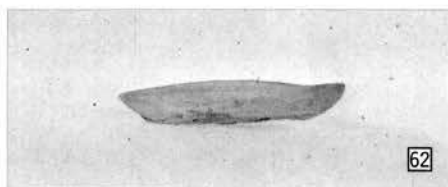
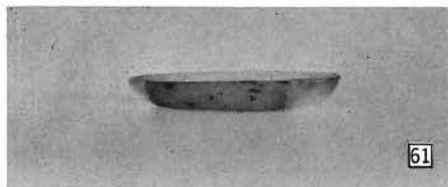
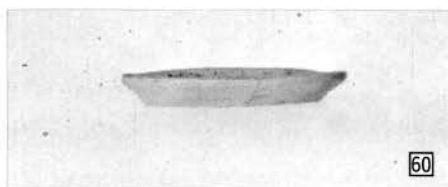
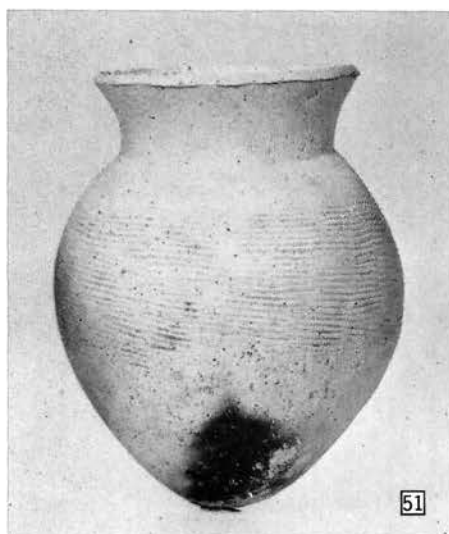
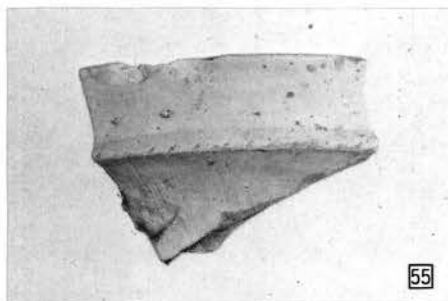
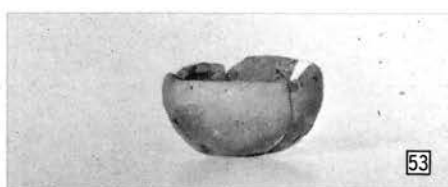
SK012出土(27~30) SK013出土(32)

SK022出土(34・35)



SK027出土(36)

SK030出土(37・41・43・44~48)



SK036出土(50) SK028出土(51・52)
SD004出土(53・55)
SD001出土(59~63)



64



66



69



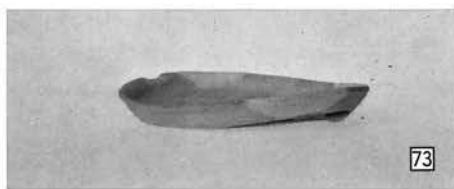
70



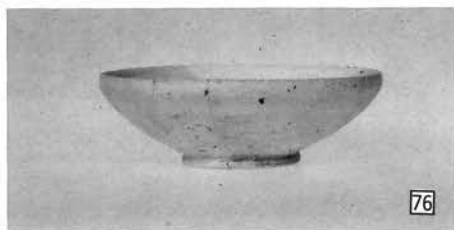
71



72



73



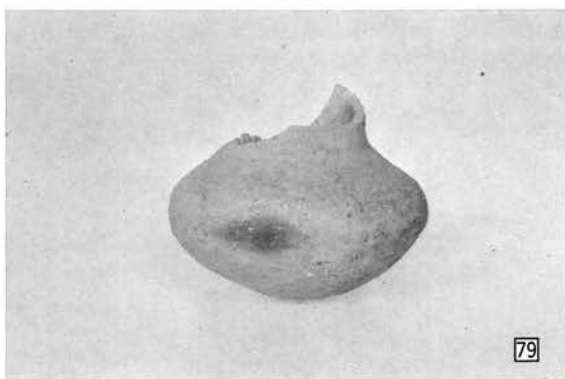
76



77



78



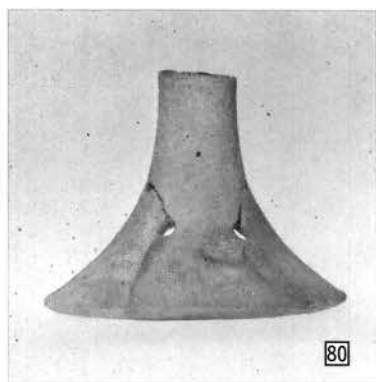
79

SD001出土(64・66) SE004出土(69)

SE007出土(70~72) SE014出土(73)

SE024出土(76) SE025出土(77)

クリーク出土(78・79)



80



84

褐色土層出土80~84

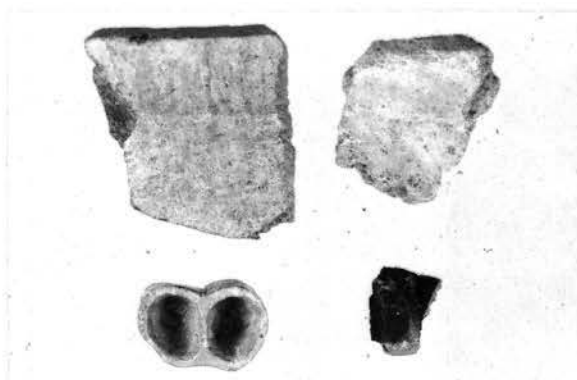


81

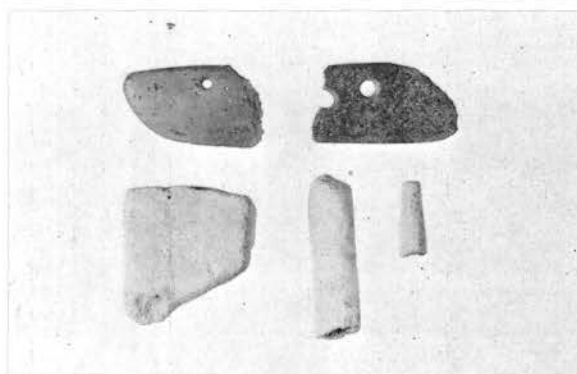
石器・石製品・土製品

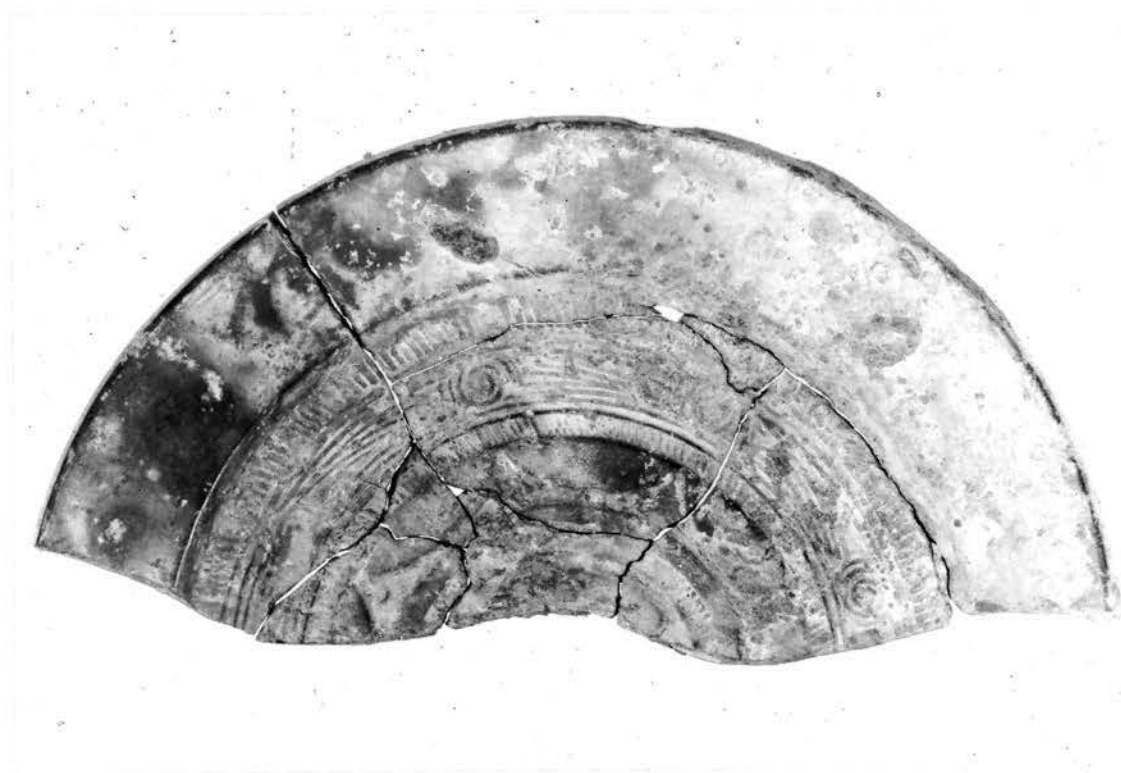


82



83





SD004出土連孤文鏡



柴尾橋下流遺跡発掘調査に参加した蓮池町の方々

佐賀市埋蔵文化財調査報告書第14集

柴尾橋下流遺跡

昭和57年3月31日

発行 佐賀市教育委員会
佐賀市栄町1番1号

印刷 佐賀印刷社
佐賀市高木瀬町長瀬1136-54